
そんな僕の日常

市河りゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな僕の日常

【Nコード】

N9939B

【作者名】

市河りゅう

【あらすじ】

僕の名前は伏見玲、高校1年の男子。低身長、女顔というコンプレックスを持っているけれどごく普通の一般人だ。これはそんな僕と周りの人たちの日常のお話。

#1 親友の頼み事

「よう、親友。お前を親友と見込んで頼みがある」

学校が終わった放課後、今日はどうしようかと考えていた時彼が話しかけてきた。

彼の名前は佐川敬吾。^{さがわけいし}中学で出会いそれから中学時代ずっと同じクラス、同じ高校に進学し、四年目のクラスメートである。

『よう、レイ。ケイの話を聞いてやってくれよ』

同じくやって来て英語で僕に話しかけてきたのは二年前から日本に移り住んでいるリチャードだ。ちなみにレイとは僕、^{ふしみれい}伏見玲のことである。

リチャード——通称リッチ——が僕に対して英語で話しかけてくるのは、僕は小学生の頃四年ほどイギリスに住んでいた帰国子女で話すのは苦手だけどヒアリングは今でもほぼ完璧、リッチも同様にヒアリングは出来るけれど話すのは苦手という状況だからだ。僕は日本語でリッチは英語で話をする、周りからするとよく分からない感じで会話をしている。

「どうしたの、いつたい？」

声変わりをしたにも関わらず若干高めの声で僕は答えた。外人とは違う感じに高い、子供っぽい声は僕のコンプレックスの一つだ。

ここで僕らについて軽く説明しておこう。

佐川敬吾。身長172センチ。短い黒髪は重力に逆らって上向き。平均よりも整った顔立ちだが目付きが悪い。がっしりとした筋肉体質。成績は平均。声はやや低めだけど不思議と通る声。サッカー部。リチャード・ボガード。^{ブロード}身長179センチ。肩の辺りまで伸ばした金髪、白い肌、蒼眼。そこそこ整った顔立ち。細くもなく太くもなく普通の体格。理系が得意で文系は不得意。外人特有の声。バスケット部。イギリス人。

伏見玲。身長147センチ。やや茶色がかった黒髪は一般的な長さだけど若干くせ毛で毛先が外側にはねている。細身。成績は上位をキープ。子供と大人の中間みたいな声。『神さまの間違い』『お人形さんみたい』『持ち帰りたい』などと評される女顔。生徒会書記。以上。

「これから少し時間いいか？」

敬吾は常より真面目な声で言った。

「大丈夫だけど、なんかあったの？」

『ちよつと愉快過ぎることがあるんだよ』

リッチは敬吾と違って楽しそうに言った。ネイティブの英語は敬吾にとつてあまり何を言っているかが分からず、ただその雰囲気から不機嫌そうに眉をひそめた。

「こいつが何を言ってるかは知らんが、真剣な話だ。力を貸してくれ」

「オーケー。どんな話？」

たいして考えずに僕はうなずいた。

「ここだと話づらい、ベルマリーに行かないか」

ベルマリーというのは学校から少し離れた所にある喫茶店で、甘党の僕はたびたび使用するお店だ。コーヒーとケーキの美味しいお店で敬吾はこのコーヒーを気に入っている。

「部活はいいの？」

「ああ」

「ん、分かった」

僕も今日は生徒会のない日だ。

そんな僕らのやりとりをリッチはニコニコ、いやニヤニヤして見ていた。

——カランカラン

心地よい鈴の音が客が入って来たのを告げる。僕たちは可愛らしい衣装の店員さんに円いテーブルに案内された。膝のあたりまでの丈の長い水色のワンピースに、控えめにあしらってあるフリルのエプロンは不思議の国のアリスを思わせる。

「僕はラズベリーのタルトとミルクティーにしようかな。二人はどうする？」

「コーヒー」

『カスタードプリンとコーヒー』

すいませ〜ん、と店員さんを選んで注文をする。

しばらく待つと注文した品が届く。

「それで話って何？」

「ああ、えつとだな……」

普段の敬吾からすると珍しいぐらい歯切れが悪い。彼は物事を割りとはっきりというタイプだ。そんな敬吾を見ているのも面白いかとも思ったが、さすがに悪趣味かと思ひ隣のリッチに聞くことにする。

『好きなやつができたんだとよ』

リッチは簡潔にしかも簡単な、敬吾にもわかるぐらいの英語で言った。

「バ、バカ野郎！」

どなった敬吾の顔は赤くなっていた。ようやくリッチのニヤニヤしていた意味が分かった。僕も人のことが言えた義理でもないが、敬吾は今まであまり女性というものに興味を示したことがなく、ここまで過剰反応されたら大変とても非常に楽しく思うのも仕方ないことだろう。

「……ニヤニヤするな」

どうやら顔に出ていたらしい。

「それで、誰なの？ 一年？ 同じクラス？」

表情を改めて僕は聞いた。

「コーヒ―を一口飲んだ敬吾は目線をそらしながら言った。

「二年の夏目彩花なつめさいかというらしい」

「らしいって…」

「リッチがそう言った」

なるほど、だからリッチが僕よりも先にこの話を聞いていたのか。実はさつきから、もしかして敬吾は僕よりもリッチのほうを頼りにしているのでは、と心配していたのだ。僕のほうが付き合いは長いんだし。リッチは女の子が好きでめばしい女の子を大体チエックしているみたいだから敬吾はリッチに話したんだろう。

「で、その夏目さんってどんな人なの？」

僕はリッチと違って女の子をチエックしていないから夏目さんとやらを知らなかった。自分の学年だけでも精一杯だ。

「お前、知らないのか？」

「うん」

おいおい、話が違っじゃねえかと言わんばかりにリッチをにらむ敬吾。

「おちつけヨ、ケイ」

リッチが日本語で言った。少しイントネーションがおかしい。

「…まあいい、どうせ話すつもりだったからな」

ならにらむなよ、僕が言つと、しょうがないだろ、期待してたんだから、と返ってきた。何故なにゆえ、と思っているとリッチが話しかけてきた。

「お前本当に知らねえのか」

「うん」

「ひでえ奴だなあ、お前は」

ふう、やれやれと言ったジェスチャーをするリッチ。どうでもいいですがこういう時外人は動作が大きくてむかつかますね（偏見）。

「なんでさ」

「月に二回会ってるんだぞ、おまえ」

「…覚えにないんだけど」

考えてみたけど、思い当たる節がない。

『会ってるだけじゃなく話もしてる』

考える、考える、考える。

「知らないけど」

その言葉に敬吾は落胆し、リッチはさつきと同じリアクションをした。殴りたい。

「別に僕が好きだって言うんじゃないんだから分からなくたっていいだろ。」

『ちよつ、お前蹴るなよ』

「うるさい、別に痛くないだろ」

リッチはもういい。

「で、誰なの啓吾？」

「図書委員長らしいんだが、玲、お前本当に知らないのか？」

「図書委員長？」

「ああ」

ああ、なるほど。どうりでリッチが知ってるはずだなんて言う訳だ。

僕の通っている高校、鳴翔めいしょう高校では月に二回各クラス委員、各種委員長、それに僕の所属する生徒会メンバーで集会が開かれている。むりやり生徒会に入れられた僕にはめんどくさいことだ。

「あの人って夏目っていうんだ」

『お前ね、あんなにかわいがってもらってんのにそれはちよつとひどくねえか』

「知らないよ、そんなの」

不本意なことに僕は前述の容姿のため、特に周りに可愛がられており、女性陣の方々のそれは少々激しく、平気で後ろから抱きつかれたりする。その中には“夏目”さんもいたはずだ。

「いちいち覚えてるわけないだろ」

だってあまりにも数が多いのだから。一人、二人ならともかく十人単位で名前なんて覚えられるわけがない。そもそも今は十二月に

なつたばかりで、僕は後期生徒会役員として十月の半ばから就任、最初の顔合わせも含めて三回しか会っていない。

ちなみに鳴翔高校では四月と十月に生徒会選挙が行われ、書記だけは立候補ではなく当選した生徒会メンバーが決めるシステムになっている。

「だが、隣に座ってるんじゃないかったのか」

敬吾がリッチを見ながら言った。リッチはそれに頷いていた。

「……まあね」

言われてみれば確かにそうだったような気がする。当然ながら集会では座る席は決まっている。

『隣ぐらい覚えておけよ』

「分かったよ悪かったよ。それで頼みがあるんだっけ？」

僕はこれ以上非難される前に話を進めることにした。

「あ、ああ……」

さつきも見たようなはつきりしない態度になる敬吾。今度はさつさとリッチを見る。

『お前明日集会があるだろ。そこでケイをアピールしてやれよ』

「どうやってさ？」

『知らん』

なんなんだそれは。リッチは僕を見て一層ニヤニヤしていた。なるほど、僕のことと笑いの対象だったらしい。リッチは僕がこういう時に断らないのを知っている。僕は友達からの頼みは出来るだけ協力することになっている。リッチはそれを知ったうえで僕が悩むのを楽しんでいるのだろう。

敬吾を見ると

「頼む」

とだけ言って頭を下げてしまった。

「……………」

「……………」

『（ニヤニヤ）』

ふう、と僕はため息を吐いた。

「……分かったよ」

言って僕は半分ほど残っていたミルクティーを飲み干した。

「ありがとう、玲」

敬吾はここに入ってから始めて笑った。それを見てみると、まあいいか、というように思った。

『（ニヤニヤ）』

でもリツチのにやけ顔はむかついたので僕の分を奢らせることに決めた。

#2 姉さんと母さんと僕

「じゃあな」

『また明日』

あれから僕は帰りながら敬吾が夏目さんを好きになったきっかけを聞いた。リッチもその辺は聞いてなかったらしく興味深そうに聞いてた。

どうも夏目さんはサッカー部のマネージャーさんのお友達らしく、以前からちよくちよく顔を見かけていたらしい。そして昨日少し話をし、好きになったのだという。

なんとも急な話である。ていうかちよくちよく来るんだったら自分でなんとかしようよ、とか、人にあんなこと言っておいて自分の方こそ何回も見ていて名前も知らないんじゃないか、とか言いたかったけれどやめておいた。まあリッチが代わりに言ってくれたけど。

電車を降りて二人と別れた僕は間もなく家に着いた。

「ただいま」

僕は居間に声をかけながら自室へ向かった。時刻は六時を少し回ったところ、母さんは定時に仕事を終えるためにこの時間はたいてい家にいる。

「おかえりなさい」

階段を上がりながら後ろから母さんの声がした。

「よう、おかえり。今日は少し遅かったな、生徒会の集まりは確かない日だろう。何してたんだ？」

自室に入る直前、話しかけてきたのは

「ただいま、姉さん。ちよっと友達の話聞いてたんだ」

僕の一つ年上の姉、羽衣^{うい}姉さんだった。

羽衣。身長170センチ。背中の中ばまである黒髪のロングスト

レート。すつきりとした輪郭に大きな瞳、各種整ったパーツ。きれいな大人の女性の声は男口調。手足は長く細身。一部から姉御とかわわれている男前な性格だけれど可愛いものが好き。それが僕の姉だ。

「そうか。まあ、そんなことはどうでもいい。玲、少し部屋に来てくれ」

きれいな顔がニコリと微笑む。多くの人はこの笑顔にみとれてしまっただろう。もしかしたらひとめぼれしてしまう人もいるかもしれない。けれど僕には嫌な予感、いや確信がある。

「……なんでさ？」

「いつものだ」

「……… やっぱり。無駄だと分かっているけど言っておこう。

「嫌、なんだけど……」

「拒否権が無いことぐらい分かっているだろう？」

僕はがつくりとうなだれた。

「さっさと来い」

言われて僕が部屋に入ると姉さんは机の上に置いてあった紙袋からおもむろに大きな赤いリボンを取り出した。

「……… 今日はいったいどうしたのさ？」

「ふむ、今日学校にな、大きなリボンを持ってきた女子がいたんだ。それを何人かがつけて遊んでいたんだが……」

「……… それでなにさ？」

「お前の方が似合うと思うてな。ちよつと買ってきた」

「……… おおむね予想通りの返答が返ってきた。だってこんな大きなリボン今までこの家で見たことないもの。

いつものことだ、いつものことだが僕は抵抗を諦めたことは（あまり）ない。

「姉さんが着けた方が似合うと思うな……」

「いや、私のような背の高い女が着けても似合わん」

「……… それは僕の身長が低いということでしょうか。まあ、低いけ

どね……

「で、でも僕が着けても似合わないと思うな……」

「大丈夫だ。自信を持て」

そのような自信を男が持つてしまったら致命的だと思うのですが。

「で、でもさ……えっとさ……」

「ん、どうした？もうネタ切れか？」

ネタとか言わないでほしい、こちらは一生懸命考えているのだ。

「ところで私はこんなものを持っているんだが」

そう言つて姉さんはズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

「まあ、そこまで嫌だと言つなら諦めないこともないが、……どうする？」

ああ、もうなんというか……泣きたい。いつもいつもこうだ、僕がどれだけ抵抗しようとおれを出されたら何も言えなくなる。

あの中には僕の弱みがぎっしりと詰まっている。正確に言えば、今姉さんが僕にしようとしてることよりも数段上の姿をした僕が。最初断つたとき姉さんは待ち受け画像を変更した。……僕の恥ずかしい写真に。

次に断つたとき姉さんは、『一枚100円で6000円になった』と、大変嬉しそうに言った。後日クラスメートから『髪をカラフルなゴムとビーズ紐で飾られた僕』を見せられた。姉さんが待ち受けにしていたやつだった。

「次はいくらになるかな？」

普段は使わない“”まで使つて僕を言葉でいじめる姉さんはとてもひどいと思う。だってあの中には僕にとって、もっと恥ずかしい写真しかないのだ。

結局いつものように僕は無条件降伏することになった。

「あら、れいちゃん。すっかり可愛くなっちゃって」

あれから僕は姉さんにてつきりボンだけかと思っていたのに化粧までさせられた。最後の意地として僕は制服ブレザーのままだ。だって、下手に私服にすると普段から女の子に間違えられることがあるもの。……頼むから姉さんを止めてよ、母さん」

「いいじゃない、可愛ければ」
食事の準備の整ったテーブル、向かいに座る母さんの言葉に僕の隣に座っている姉さんが満足そうに頷いた。

「風呂まで取ったらダメだからな、玲」

携帯出しながら言わないでください……。

ちなみに今日の食卓にあがるのはハンバーグにポテトサラダ、コンソメスープという純洋食といった感じた。

「父さん、早く帰ってこないかなあ……」

四人家族のこの家で僕の味方は父さんだけだ。父さんだけは僕をちゃんとした男の子として扱ってくれる。

「あらあら、可愛い息子にこんなこと言われるなんて、お父さんも幸せねえ」

息子だって分かってるなら息子として扱ってほしい、そう思うのはわがままなのでしょうか……。

「ふむ、きつと父さんも浮かばれるだろうな」

いや、なんか死んだみたいに言うのやめようよ。

「父さんがいなくなってもう一年と八ヶ月か……」

「うん、あと四ヶ月だね。父さんが帰って来るまで」

早く帰ってきてほしい。父さんがいなくなってからだ、姉さんの奇行が悪化したのは。その前まではせいぜい髪をいじるぐらいだったのに……スカートなんて着たことなかったのに……。

父さんイギリスを外国へ転任させた会社を僕は少し恨みます。

とりあえず牛乳でも飲んで背が伸びることを祈ります。ご飯食べたらさっさとお風呂行こう。

ふむ、今日もまた新しい一枚が我がコレクションに加わった。

「なあ、母さん」

「なあに、ういちゃん」

玲は夕食の後すぐに風呂に行き、私たちは食後のお茶を楽しんでいた。

「どうして玲はあんなに可愛いのだろうか？」

「わたしの息子であなただからじゃないかしら」

なるほど、母さんも私も自分でいうのはなんだが美形に分類される。要は家系なのだろう。

「なあ、母さん」

「今度はなあに？」

「玲はとてもとても可愛いと思う」

「そうね」

「そんな玲を私たちだけで独占していてもよいものだろうか？」

「……独占してるつもりはないけど？」

「私は玲の可愛さをもっと皆に発信していくべきだと思うのだ」

「……どういうこと？」

「つまり」

「つまり？」

「ホームページでも作って玲の写真を載せたい」

私の手元には玲の写真がたくさんある。具体的にいえ約25KB キロバイト
×1000ほど。

「それをわたしに言ってどうするの？」

「許可と、あと手伝ってほしい」

母さんは仕事でよくパソコンを使っている。対して私は簡単な操作しかできない。

「嫌よ」

しかし、そんな私の願いは断られた。

「なぜ？」

「私の許可じゃなくて玲の許可を取りなさい」

「玲は絶対に首を縦には振らないだろう」

「だったらだめよ」

「そこをなんとか」

「だめ」

「なんでもするから」

「なら諦めなさい」

「無理だ」

「なんでもするんでしょう」

……それからなんの進展もない会話は、玲が風呂から出てくるまで続いた。

そんな感じに玲の知らぬ間に迫った危機は、玲の知らぬ間に去った。

#3 学校にて 登校〜昼食

—— ジリリリリリ

無機質な目覚まし時計の音が部屋に充満していくのに耐えきれず、僕は目を開いた。

時刻は7時ちょうど。7時50分に出れば間に合うのでゆっくりと身支度をして食卓に向かった。まあ、男の身支度なんてすぐに終わるのだけれど。

「おはよう、れいちゃん」

「おはよう、玲」

そこには朝食の準備を済ませた母さんと、僕と同じ学校のブレザーに身を包んだ姉さんがいた。

「おはよう母さん、姉さん」

今日の朝食はベーコンエッグにマーガリンを塗ったトースト、ホットミルクというだいたいいつものメニューだった。ちなみに春ぐらいになるとミルクは冷たくなる。

「今日はたしか集会があつたな」

「うん」

姉さんは今期の風紀委員の委員長をしている。幸い集会るとき僕と姉さんの席は離れているけれど。

「そういえば姉さん、夏目さんって知ってる？」

「夏目？ 図書委員の夏目か？」

「うん、知ってる？」

僕が聞くと姉さんはひどく怪訝そうな顔をした。

「同じクラスだから知っているが、夏目がどうかしたのか？」

「ちよつとね。それでどんな人？」

姉さんは少し考え込むようなしぐさをした。

「二人とも時間はいいの？ お母さんはもう出かけるから戸締りよろしくね」

そんな姉さんの考えがまとまる前に母さんの声がした。

「わ、もうこんな時間だ。姉さん急がなきゃ」

「うむ」

とりあえず僕たちは急いで朝ごはんを食べることにした。

「……まさか玲は夏目のことが」

食べてる間、姉さんが何やらぶつぶつ言っていたけどよくわからなかった。

あれから家を出て電車に乗って学校最寄りの駅について、というところでその間無言だった姉さんが、朝の話なんだがと前置きをして言った。

「どうして夏目のことなんか知りたがったんだ？」

「どうしてって言われても……」

さすがに敬吾の許可もなく話せるわけがないから答えようがないんだけど……。

「えっと……うん。ちょっと知りたかったただだから、もういいや」

あはは、と僕はごまかすことにした。周りには同じ電車に乗っていた鳴翔生も多い。そんな中で「ほら、敬吾って知ってるでしょ。あいつが夏目さんのこと好きなんだって」なんてなおさら言えるわけないし。

そうすると姉さんはまた考えこみ始めた。さつきから一体どうしたんだろっか？

そんな姉さんを心配してるうちに学校に到着した。いまだに考えを続ける姉さんに別れを告げ、僕は自分の教室に向かった。

教室に入ったのは遅刻ではないにしろいつもより若干遅い時刻だった。

「玲くんおはよー」

教室に入ったとたんに声を掛けてきたのは幼なじみの田村優たむらゆうだった。

田村優。身長159センチくらいで栗色の髪はボブカット。元気

な女の子といえはだいたいいつてゐる、それなりに可愛い女の子だ。彼女と僕は幼稚園の年長組の時に姉さん経由で知り合った。優のお姉さんと僕の姉さんが親しくなつたからだ。

「……おはよう」

彼女の友達も続いてあいさつをしてくれる。

「おはよう優、野々山さん、樋口さん、三輪さん」

一人ずつ名前を呼びながら僕もあいさつを返して僕は席に着いた。僕の席は前から二番目の窓際だ。以前の席がえの時に後ろになつたのをリッチと代えてもらった場所だ。僕はあまり後ろだと前の人で見えなくなつてしまつたための措置だ。

「……おはよう」

席に着いたところで声をかけてきたのは僕の隣に座る古川陽菜だ。
ふるかわひな

つた。

「うん、おはよう」

古川陽菜。身長155センチ。一見無造作に後ろで一つにまとめである黒髪は、手入れが行き届いていてもきれい。カラスの濡れ羽色というのだろうか。可愛いというよりきれいといった感じで、細いセルフレームの眼鏡と合わさつて少し堅い感じがする。

今の彼女は本を読んでいるけれど、いつもそうしているわけではなく、読みたい本がある時だけこのようにおとなしく本を読んでいるだけだ。

そんな彼女のマイペースさを周りも理解しており、そういうときの彼女に熱心に話しかけようとする人はいない。

「今どんな本読んでいるの？」

そう尋ねると彼女はブックカバーを外して背表紙を見せてくれた。
「あ、それ知らないやつだ」

ちなみに彼女が読むのは主にライトノベルと呼ばれる本だ。彼女のおすすみを僕もたまに買って読んでゐる。

「面白い、それ？」

「……試しに買って見たけど少しいまいち」

彼女の評価は辛辣だ。その分彼女が面白いと言う本は例外なく面白いのだけれど。

「そついえば古川さんって図書委員だよね？」

「いまいちという評価を聞いて、僕は遠慮なく話しかけることにした。彼女は愛読書バイブルを読んでいる時に話しかけるとそれはもう怒る。

「……うん」

僕の言葉に彼女は本から目をそらさないまま答えた。

「あのさ、夏目さんのこと聞きたいんだけど」

「……いいけど、もう時間ないよ」

言って指差した時計は始業3分前だった。

「え、嘘!？」

そついえばいつもの感覚で話していた。今日は少し遅れてきたのに。

「じゃあまた後で聞いてもいいかな？」

「………いいよ」

依然として彼女は視線を固定したままだった。つまり、僕と話している間文字を追って本を読んでいない、ということに僕は気付かなかった。

「玲」

『レイ、メシ行こうぜ』

昼休みになつて、敬吾とリッチが僕のところにやってきた。僕たちは基本学食派だ。席を立ち隣に声をかけながら食堂に向かう。

「お前、古川と仲いいよな」

「え、そうかな？」

『そうだが、古川って女にはともかく男にはお前以外ほとんど話すところ見ないぞ』

「敬吾、古川さんって男子と話さないの？」

「ん？ああ、あまり見ないな」

「それって、つまり……」

「ああ、そういうことだろうな」

『ああ、疑うことなくそういうことだろうな』

僕の言葉に敬吾がうなずき、そんな敬吾にリッチが同意した。

「……僕が男として見られていないってことかな？」

僕はうなだれながら言った。

そんな僕の言葉に、二人もタイミングを合わせたかのようにうなだれた。

「……どうしたのさ？」

「なんでそうなるんだ？」

「だって男子と話さないってことは僕がそういう風に見られてないってことでしょ？」

「……」

『……』

「……どうしてそんな目で見るのさ？」

二人はなんか僕をかわいそうなものでも見るような目で見てきた。

「いや、いい。俺が言うことでもないしな」

『ああ』

だったら二人して溜息を吐くな。

そんな話を話しているうちに学食に着いた。

「玲、お前席取つといてくれ。俺とリッチで買ってくるから。」

「うん、わかった」

「なあリッチ、あいつの鈍感さってどう思う？」

「ショージキありえないナ」

そんな会話が二人の間で交わされた。

3つの空席を首尾よく確保した僕は人数分の水を置いて場所取りをアピールしていた。

そんなとき不意に頭を撫でられた。振り向いてみると

「…姉さん？」

がいた。

「…何してるの？」

「いや、つい」

「恥ずかしいからやめて」

「ん、わかった」

姉さんは一応TPOというものをわきまえている。こういう場所では頼めばやめてくれるのだ。しない、という選択肢がないところが悲しいところだけだ。

「ここあいてるか？」

「うん、あいてる」

〇〇〇

〇〇●

という感じに6つ席が空いていたので僕は●のところに座り、二人の水は向かいに置いてあった。残りの3つにはまだ誰もいないので姉さんが座っても問題ない。

「じゃあここのふたつもらうぞ」

そう言つて僕の隣に陣取り、さらにその隣に水を置いた、その時に僕らの横に人が来た。

「あら羽衣ちゃん、場所とつたらわかるように立っててよ」

そう言いながら後ろから声をかけてきたのは優の姉の美羽^{みう}だった。

田村美羽。妹と同じぐらいの身長。妹とは対照的におっとりした感じで長い髪をポニーテールにしている。

「こんにちは、美羽さん」

「ええ、こんにちは玲君」

「……頭撫でないでください」

しぶしぶといった感じで美羽さんはやめてくれた。

「なんか早くない？ 敬吾たちはまだ並んでるのに」

「ああ、授業が少し早く終わったからな」

「え？ 姉さんたちって今来たんじゃないの？」

「いや、玲の姿が見えたから移動してきただけだ」

姉さんが指さした場所には空席が二つできていて、あ、埋まった。

「羽衣ちゃんは玲君が大好きだからね」

「ふむ、そうはつきりと言われると少し恥ずかしいな」

僕だつて恥ずかしいよ。

「ところで羽衣ちゃん」

「なんだ美羽」

「席かわつてくれない？」

「だめだ」

「いいじゃない、家で独占できるんだから」

「いや、母さんと半分ずつだ」

こんなところで静かに言い争うのはやめてください。というか僕は物扱いですか？

どこかに3つ席空いてないかな、僕はここから逃げたくなくなってきました。

「待たせたな」

『おいおい、ずいぶん騒がしいな』

そんなときに僕の分も持った敬吾とニヤニヤしているリッチが来た。

「B定食でいいんだよな」

「うん、ありがとう」

敬吾はラーメン、リッチはパスタだった。

逃げることは出来ないけど、一人じゃないなら少しはマシだ。

とは言えこの状況を放置しておくわけにもいかない。

（敬吾助けて）

けれど状況の打開が自分では無理だと知ってる僕は敬吾に助けを要請した。

（分かった）

敬吾は力強く頷いてくれた。

俺は二人に向けて顔を向けた。

「先輩方」

「なんだ後輩」

「なんですか佐川君」

この返答のタイミング、こういう時この二人は本当に仲がいいなと思う。

「いい加減にしないと嫌われますよ」

俺は二人に近づき玲に聞こえない音量で言った。主語は知らない、対象は明白だ。

「玲が私を嫌うわけじゃないか」

「玲君は人を嫌ったりするようない子じゃありませんよ」

俺に合わせてくれたのか、さすがに恥ずかしいセリフを言っていると思ったのか分からないが、二人も音量を抑えて答えた。

「そんなことは知ってます。だからこの辺にしておかないと、リッチと一緒に玲にないことないこと吹き込むことにします」

「……玲はお前たちより私を信用するはずだ」

「あなたたちより私のほうが付き合いは長いですよ」

「それ知ってます。なので田村も巻き込みます。さすがに三人がかりでいけばこちらのほうを信じてくれると思いますよ」

「……」

「……」

無然とした表情で二人は黙り込んだ。

「じゃあ、昼食でも食べましょうか」

俺はここで音量を戻して言った。

「というか先輩方、いつも似たようなこと言ってるんですからいい加減さつさとやめるようにしてくださいよ」

そう、これはいつものやり取り。一週間に一度は起こる茶番。

「……簡単に引いては私の名がすたる」

「だって途方に暮れている玲君ってかわいいじゃないですか」

そんなことで玲は振り回されてるのか。
その言葉に俺は自分の親友に深い同情をおぼえた。

#3 学校にて 登校〜昼食（後書き）

今回 E M ・ R E D という作品から表現方法をお借りしました（あまりうまく使えてませんが）。ファンの方々申し訳ありません。

この本は大変面白いです。 B L A C K、 B L U E という長編も面白いのですが、力説したいのは短編である R E D。自分の知ってる限り短編というものはある程度続いてくると多少パターン化してきたり飽きてきたりする気がするのですが、この作品はそんなことなく一話一話がとても面白いのです。ちなみにライトノベルなので読まない方にはお目汚しでした。

読んでくれた方々、ありがとうございました。

#4 学校にて 昼食↳下校

敬吾のおかげで姉さんたちの口争いが終わった後、ぼくたちは食事を始めた。ちなみに姉さんが席を譲ることはなかった。

「なあ、玲。朝のことなんだが……」

そうやって姉さんが話しかけてきたのは食器の中身をほとんど食べ終えたときだった。

朝のことって？　なんて思うほど僕はバカじゃない。夏目さんのことに関してだろう。

「だから、そのことはもういいんだって」

僕は朝の返答をまた繰り返した。実は姉さんに聞くまでもなく夏目さんの情報は入手している。というのも、1時限の途中で隣の古川さんから夏目さんのことについて書かれた手紙を手渡されたからだ。こう言うては失礼かもしれないけれど、かわいらしい便せんに少し丸みを帯びた字が意外だった。何となく僕は几帳面な、お手本のようなきれいな字を想像していた。

姉さんからより詳しい情報を得られるのならそれにこしたことはないのだが、当然ながら周りには鳴翔生が大勢いる。知り合いに聞かれるかもしれないリスクを考えるなら、ここで話は聞かないほうがいいだろう。

「いや、お前がよくても私はよくない」

けれど姉さんはそんな僕の思惑をぶった切ってしまう。

「朝のことって何の話、羽衣ちゃん？」

頭の上に？マークを浮かべて美羽さんが聞いた。

「ふむ……、美羽にも知っておいてもらったほうがいいか。実は玲が夏目のことに関して聞いてきたんだ」

「玲君が、夏目さんのことを？」

「ああ」

さて、うん、どうしようか。具体的には分からないけれどとてつ

もなく嫌な予感がしてしょうがない。

僕はちらりと敬吾とリッチの器をみる。二人ともすでに食べ終わって、僕のことを待っている状態だ。

「あ、そうだ。僕、用事があるから……」

というわけで、ぼくは逃げることにした。

「敬吾、リッチ、行こう」

僕たちはトレーをもって立ち上がった。

「あらあら、玲君にもようやく春が来たんですね」

「いや、私は認めないぞ。玲にはその、恋人だとかそういうのはまだ早い」

そんな会話をしていた二人は、玲の逃亡に気づくことはなかった。

「よかつたのか？ 先輩たちのことを放っておいて」

「っていう力、おまえ、ケイのことはなしたの力？」

食堂を出たところで敬吾とリッチが話しかけてきた。リッチが日本語なのは、たぶん敬吾のことに關してのことだからだろう。彼にとって何らかの基準があるのだと思うが、それが何なのか僕にはわからない。

「まあ、放っておいてもいいんじゃない、一応声はかけたんだから。ただ夏目さんのことを聞いただけで、敬吾の名前は出してないよ」

前半は敬吾に、後半はリッチに顔を向けて僕は答えて、それから前に向きなおした。この身長差では、ずっと見上げているのは首が疲れる。

「そうか……でも、だったら余計放っておいたらまずいんじゃないか？」

敬吾は自分の恋心がばれていないとわかって少しほっとした様子であったが、すぐ心配そうな顔を向けてきた。

「何で？」

「カクジツにゴカイしてるゾ、あのフタリ」

僕に答えたのはリツチだったが、日本語の語彙が足りていないのかいまいちわからなかったので、僕は敬吾を見た。

「たぶん先輩たちはお前が、その、……夏目、先輩のことを好きだと思っている。」

敬吾は、夏目先輩、のところで少し詰まりながら言った。おそらく少し名前を呼ぶのにも意識してしまったのだろう。が、そんなことはどうでもいい。

「……僕が、夏目先輩を？」

そんなバカな。そう言おうかと思った。なんでそうなるのかと思った。しかし、ねえさんの態度を思い返してみると納得がいく気がした。

「早く誤解を解きに行ったほうがよくないか？」

「うーん……いいよ別に。帰ってからで」

僕はその判断をわりとすぐに後悔することになる。

「玲くんって好きな人できたの？」

好奇心に瞳を輝かせながら優が聞いてきたのは、何事もなく授業を消化し、HRも終わった後にクラス委員である優と集会が行われる会議室まで一緒に行っているときだった。

「な、なんの話？ そんなの誰が言ってたの？」

何の前振りもない唐突な質問に僕はとても驚いていた。

「なんかお姉ちゃんと羽衣さんがお昼にそんなこと言ってたんだって。ねえ、ほんとに好きな人いるの？ 誰？ あたしの知ってる人？」

話からすると、僕に好きな人がいるけど相手はわからない、そういうことだろうか。

「あのさ、その話ってどれくらいの人知ってるのかな？」

「うーん……あたしは美砂から聞いたんだけど、結構な人が知ってるんじゃないかな。あたしの友達はみんな知ってたよ。玲くんって

わりと有名だし」

こんなとき自分の無駄に目立つ容姿が憎らしく思うのと同時に、昼に敬吾の忠告を無視したことを僕は後悔していた。

「そんなことより、好きな人、いるの？」

「別にいないよ」

僕の返答に優はあからさまに肩を落としたのだけど、なぜだか少しホツとしているように見えた。その反応の意味は僕にはよくわからなかったのだけど。

「じゃあなんでお姉ちゃんたちはそんなこと話してたの？」

「なんか誤解してるみたい。優からも美羽さんに誤解だつて言つていてよ」

「うん、わかった。ほかのみんなにも言つとくね」

「ありがとう、優」

こういうときそこそ顔の広い優の存在はありがたい。少なくともモク拉斯の人たちの誤解は解いてくれるだろう。

「それじゃ、またあとでね」

会議室に入った僕たちはそれぞれ所定の位置に向かった。

「こんにちは、伏見君」

「こんにちは、夏目先輩」

席に座ったところで話しかけてきたのは隣に座る夏目先輩だった。彼女は典型的な文学少女といった感じで、全体的な雰囲気は古川さんに似ている。

「あの……できれば頭をなでるのはやめてくれませんか？」

「あらあら、ごめんなさい」

古川さんと違うのは柔らかい微笑みと、こういった軽い接触行動スキンシップぐらいか。ほかの先輩方がやってこないのはよくができるだけ時間ぎりぎりにやってきたためである。逆隣りに座っているのは男子なので警戒する必要はない。

さて、これからどうやって敬吾のことをアピールしようか？
一応昨日考えてみたのだけど、思いついたのは世間話をしながらさりげなく敬吾の話題に持っていこうという場当たりのなもの。とはいえ、迷っている時間もない。

「そういえば休み明けのテストだけど、伏見君は勉強してる？」

そんなことを考えていたら先に話しかけられてしまった。

テストというのは期末テストのこと。今まで誰からも話題に出なかったのが不思議なくらいタイムリーな話題だ。今日は金曜日、テストは3日後だ。

「いえ、あまりしてないですね」

ぼくはできるだけ学校にいる間に覚えるようにしている。家だといつ姉さんの発作が始まるかわからないからだ。

「ふーん、余裕なんだね」

「夏目先輩はどうなんですか？」

「私？ 私はちゃんと勉強してるよ。明日も図書館に行つて一日勉強するつもりだし」

その時、ドアを開けてプリントを持った会長と副会長がはいってきた。僕と先輩は座りなおして会話をやめることにした。ちなみに会長は女、副会長は男だ。

「それではこれから集会を始めます。今日の議題はクリスマスパーティーについてです。3年生のクラス委員の方はプリントを受け取ったら帰っていただいて結構です」

会長が話しながら副会長がプリントを配る。

この学校は12月24日に終業式を午前中に行い、午後には自由参加のクリスマスパーティー——クリパを開く。こういうところはさすが私立高校だと思う。

3年生にとつては数少ない息抜きということになる。自由参加なので恋人がいる人はそちらを優先すればいい。プリントを見る限り、内容としては軽い立食形式のパーティーのようだ。学校側からの手引きで業者からかなり格安でタキシードやドレスが借りられると書

いてある。

「ねえ、伏見君はクリパ出るの？」

隣から小声で話しかけてきた。

「いえ、まだ分からないですけど…… 夏目先輩はどうなんですか？」

僕も同様に小声で返した。

「私は出るつもりかな。彼氏とかがいるわけじゃないしね」

へえ、そうなんだ。知ってるかもしれないけど、敬吾に後で伝えておこう。

「詳細はプリントに書いてある通り、何か分からないことがあれば私か実行委員の方を尋ねてください。一部の委員の方には手伝ってほしいことがあります、その分担は……」

会長の声をBGMにしながら、敬吾のことアピールできなかったなあ、と僕は反省した。

私は一人教室にいた。

今日は図書委員の当番で今まで図書室にいたのだが、忘れ物をしたので取りに戻ってきたからである。

「伏見君、夏目先輩のこと好きなのかなあ……」

なんとなく口に出してつぶやいたのは隣の席の男の子——私の好きな人のことだった。

朝、夏目先輩のことを聞かれ、昼に伏見君には好きな人がいるという話を聞いた。つまりは、そういうことなのだと思う。

おそらく自分にとって伏見玲という存在は——アイドルや本の主人公、そういったものを除けば——初恋の相手だ。これまでそういうことにあまり興味のなかった私は彼が近くにいて、いや、同じ教室の中にいるだけで満足だった。それだけで幸せだった。例えば彼に好きな人がいても、ましてや恋人が出来たとしても、そのことに変わりはない。

なのに、なのにとても寂しいような、悲しいような気がした。

「あれ、陽菜？ どうしたのこんな時間に？」

いつの間にかうつ向いていた私の顔を上げさせた声の主は優だった。

「さっきまで図書当番だったんだけど、ちょっと忘れ物しちゃって」

「そうなんだ。あたしも同じなんだ。さっきまで集会だったんだけどさ、明日英語の和訳があつたこと忘れててね」

あはは、と笑いながら彼女は言った。

「ねえ、陽菜。一緒に帰ろうよ」

「うん」

私は頷いて彼女の所に行った。

「そうそう、玲君とそのお姉さんもいるから。げた箱で待っててもらってるんだ」

私は彼女の言葉に、伏見君の名前に思わず反応してしまった。そして、彼女はそんな私の反応を見逃さなかった。

「……………ねえ、陽菜って玲君のこと好きなの？」

彼女は直球に聞いてきた。私はそれに答えることができなかった。たとえその態度が肯定しているようなものだとしても。

「そんな陽菜にうれしい情報があります」

そんな私を見て、彼女はことさらに明るい声で言った。

「聞きたい？ 聞きたいよね？」

私は何のことかわからなかったけど、その勢いに押されて頷いていた。

「うんうん、あのね……………昼間の話は嘘なんだって。玲君は今好きな人がいないんだって」

さっき聞いたんだ、と彼女は続けた。

けれども、正直信じられなかった。普通、自分に好きな人ができてもあまり人には話さないんじゃないか？ 少なくとも異性には打ち明けないんじゃないか？ と思ったことを彼女に言ってみた。

「うーん。普通はそうなんだろうけど……………。でも、あたしと玲君っ

て付き合い長いしさ。わざわざ話す、とかはないと思うけど、少なくとも嘘は言わないと思うんだよね。玲君の性格からして」

私には幼なじみというものがいないけど、そういうものなんだろうか？

「それにね、嘘ついてたらなんとなくわかるんだ。なんたって、十年来の付き合いだからね」

よくわからなかったけれど、その関係が私にはすごくうらやましく思えた。

#5 図書館に行こう

土曜日。

僕は学校最寄りの駅前にいた。理由は簡単。敬吾と待ち合わせて、図書館に勉強しに行くためだ。

「玲、待ったか？」

時刻は9時半、待ち合わせ時間ぴったりに敬吾がやって来た。

「うっん、今来たところ」

「今更言うのもなんだが、まだ開いてないんじゃないか？」

ここから市営図書館までは歩いて10分。開館は10時。敬吾の指摘はもつともだ。

「うん。でもね、敬吾はあんまり行かないから分かんないかもしれないけど、開館前から並んでる人っているんだよ」

休日の図書館使用者は多い。

「それでも時間ちょうどに行っただって、普通に座れる場所ぐらいあるだろう？」

又も、敬吾の指摘はもつともだった。そこで僕は敬吾の目を見て聞く。

「敬吾……今日は何しに来たの？」

「……勉強じゃないのか？」

敬吾は目をそらして答えた。分かっているくせにごまかす敬吾に僕は言う。

「僕、昨日ちゃんと言ったよね？」

そう、今日は夏目先輩が図書館で勉強するのだ。このあたりで図書館と言ったら、僕たちが今目指しているところしかない。

「だが、そうそううまくいくものでもないだろう？」

じゃあ何で来たのさ？ そう言おうかと思っただけと止めた。

「さっきも言っただけど、開館前に並んでる人があるんだ。もしかしたらその中に先輩がいるかもしれない」

僕の考えはただそれだけ。

「もしいればその場で軽く話ができるかもしれない。うまくいけば近くで勉強できるかもしれない」

「……いなかったらどうするんだ？」

「その時は普通に勉強するだけだよ、テスト前なんだから。それに、たとえ今から行つて会えなかったとしても、先輩は一日いるつて言つてたから今日のどこかで偶然会えるかもしれない」

「つまり運任せか……」

僕の考えを聞いた敬吾は軽く首を振りながら言つた。せつかく人が考えたつて言うのに失礼な。少しムカツときた。

「いや、そんなことないよ」

だから、こうしよう。

「いるつてことはわかつてるんだ。会えなかったときは敬吾が探せばいいんだよ」

「……え？」

「運任せなのが嫌なんでしょう？ だったら偶然なんか頼らなくたつて敬吾が見つけて声をかければそれで解決だよ！」

「いや、そんなことできるわけが——」ないと、言わせない。

「うん、それで決定！ そうだ、先輩が並んでたら僕が話しかけようかと思つてただんだけど、敬吾がやったほうがいいよね！」「玲、俺にそんなこと——」「その時はちゃんと『よかつたら一緒に勉強しませんか？』ぐらい言つてよね。僕はあまり話さないようにするから」

有無を言わせようとしない僕の雰囲気気付いたのか、敬吾はあきらめて口を閉ざした。

10分というのは割とすぐ過ぎてしまう。僕たちは話している間に図書館に到着した。

「先輩がいるといいね」

入り口を通りながら僕は言つ。

「……ああ、そうだな」

これから愛しの先輩に会えるかもしれないというのに少し沈んだ口調の敬吾。

ここで図書館について説明しよう。

この建物は参考館と呼ばれている。1階はロビーと大きなテレビ2階にいくつかお店が入っていて、図書館は3〜7階スペースに入っている。7階は閉架図書専用であるから僕たちが入れるのは3〜6階。8階から上にもいろいろあるのだが、僕は9階に能楽堂があることしか知らない（中学で能を見させられた）。そんな14階建ての建物の中に図書館は存在している。

この図書館は雑多に本を入荷していて、ライトノベルはともかくとして、ゲームの攻略本が――棚ひとつ分――入っているのを見た時は驚いた。利用者のリクエストをほとんど受けつけているように、専門書から攻略本のようなものまで本当に様々な本が入っている。僕も古川さんに教えてもらった本を借りたりするのでたびたび使用する場所だ。

3階に上がってみると並んでいる人はおよそ15人。その中に先輩は………いないようだ。敬吾が軽いため息をついていたが、ホツとしたのがっかりしたのかはわからなかった。

じゃあ、とりあえず並ぼうか。そう敬吾に言おうとした時、

「あれ、伏見君と佐川君だ」

後ろから声をかけられた。その人は件の人物、夏目先輩だった。

「どうしたの、こんなところで？」

「こんなところに来る理由なんて勉強ぐらいしかないですよ」

「ふふふ、テスト前なんだからそうだよね」

僕は受け答えしながら敬吾の脇腹を肘でつつく。

「せ、先輩、おはようございます！」

「あれ、そういえば挨拶してなかったね。二人ともおはよう」

「おはようございます」

「おはようございますー！」

なぜか僕に続いて敬吾がもう一度挨拶をした。変な人だと思われ

ないだろうか、と心配したけど、先輩は苦笑とかそういう感じではなく普通に笑っていたから多分大丈夫だろう。

続いて敬吾が話すのを期待してみたのだが、無理そうだったので結局僕が話しかけることにした。

「そういえば先輩、敬吾の名前知ってたんですね」

「うん、ちよっと前に一度話したことがあったから」

はて、一度話しただけの人の名前なんて普通覚えているものだろうか？ そう思った僕はそのことについて聞いてみた。

「ううん。名前については前から知ってたの」

「どういうことですか？」

もしかして、ここで先輩も敬吾のことが好きであっさりと両思いなんて急展開なのだろうか？

「だって伏見君と佐川君とリチャード君って有名なんだよ」

そんな僕の期待は大外れ。

先輩の話によると僕たちは有名らしい。その理由は僕の身長。自分で言うのも悲しくなるけど、小学生並みの身長で僕と、共に170cmを超える敬吾たちが一緒にいるのは目立つらしい。それに加えて、僕の容姿とリッチの金髪、敬吾の整った顔立ちを相殺するほどの目つきの悪さ。程度の差はあれど個々で目を引く外見をしているのに、そんな三人がよく一緒にいれば目立つなと言うほうが無理らしい。

「せ、先輩はお一人なんですか？」

さつきから硬直^{フリーズ}していた敬吾が僕たちの会話の切れ目に話しかけてきた。

「うん」

「だったら、よければ一緒に勉強しませんか？」

先ほどからは信じられないほどはつきりと敬吾は言った。さつきまで黙っていたのは覚悟みたいのを決めていたせいかもしれない。

そんな敬吾の提案に先輩は笑顔で了承した。

カリカリカリとシャーペンが紙面を踊る音、絨毯によってある程度消されたかすかな足音、時折聞こえる小さな話し声、ページをめくる音。そんな静かな空間。

結局のところ、一緒に勉強をするといっても何かおしゃべりができるわけではない。

とはいえ、会話をする機会を増やすことはできる。

四人掛けの机の一角に座っていた僕は2時間近く連立方程式を解いていたシャーペンを置くと、隣に座る敬吾を見て、次に向かいに座る先輩を見てから口を開いた。

「先輩はお昼何を食べるんですか？」

「あ、もうお昼なんだね」

先輩は顔を上げた。

「私は外にある『ウイズ』っていう喫茶店に行こうかなって思ってたんだけど、伏見君たちは？」

「僕たちは特に何も考えてなくて。あ、そうだ。よかったら一緒に行ってもいいですか？」

「うん、いいよ。でも、佐川君はそれでいいの？」

「別にいいよね、敬吾？」

一応疑問形で聞いたけどこれはそんなものではない。決定事項だと伝えているだけだ。敬吾もそんなことは分かっているといわんばかりに静かにうなずいた。

「いらっしやいませ」

僕たちが入った店『ウイズ』は落ち着いた雰囲気のお店だった。四人掛けのテーブルが3つにカウンター席が4つ。店員さんも制服とといった感じではなく、私服に黒のエプロンをつけている、といった様子の小さな店だった。

「あれ、古川さん？」

そんな店の一角にクラスメートがいた。四人掛けのテーブルに一人で座っている。

「……伏見君と、夏目先輩？」

古川さんが顔をあげてつぶやいた。

「陽菜ちゃんと知り合いなの、伏見君？」

「はい、同じクラスですから」

そこで一つ思いついた僕は古川さんのテーブルに近づいた。

「ねえ、古川さん。一緒に座ってもいいかな？」

見たところテーブルにはなにも載っていない。おそらく来たばかりか頼んだところなのだろう。

「……別にいいけど」

ほかにも席は空いているのに相席希望という変な提案だと思うけれども古川さんはうなずいてくれた。

「ありがとう。じゃあ、隣借りるね」

そう言って僕は古川さんの隣に座った。

「それじゃあおじゃまするね、陽菜ちゃん」

勝手な僕の提案にはなにも言わずに先輩も古川さんの向かいに座った。これで狙い通り。

「早く来なよ敬吾」

僕は残った席——先輩の隣に座るのを躊躇ためらいしている敬吾に声をかけた。

「あ、ああ」

敬吾は少しだけぎくしゃくとした動きで席に着いた。

注文してから料理が来るまで僕は古川さんに話しかけることにした。

「古川さんはこんなところで何してるの？」

「お昼ごはんを食べようとしてるんだけど」

ふむ、道理だ。でもそういうことじゃない。

「じゃあお昼食べたかどうかの？」

「図書館で勉強するつもり」

「あら、それなら私たちと一緒にね」

そんな僕たちの会話に先輩が参戦した。

「午前中も図書館にいたの？」

「ううん、家にいた。席が空いているといいんだけど」

「確か私の隣の席が開いていたわ。戻った時に空いてるかはわからないけど、よかったらどう？」

「あつ、いい考えですね、先輩。僕たちと一緒に机でもよかったらそうしようよ」

「……そういつてくれるのはうれしいけど、佐川君はそれでいいの？」

「ああ、俺は全くかまわない」

それから僕たちは昼食を食べてから一緒に図書館へ向かい、午後6時まで勉強した後、解散した。

季節は冬、12月。6時となった今では外は暗闇に包まれていた。危ないからという伏見君の発案により伏見君が私を、佐川君が夏目先輩を送っていくことになった。別れ際に伏見君が佐川君に何かを耳打ちしているのが見えた。

今、伏見君は私とは降りる駅が違うにも関わらず、一緒に降りて家まで送ってくれている。

道すがら他愛のない話をしながら、私は少し緊張していた。二人きり、なんて状況は今まであまりなかったからだ。

ここでもいいよ。駅を降りるときにそう言おうと思った。けれども、普通に電車を降りようとしている彼を見て、少しでも一緒にいたいと思ってしまったからその言葉を飲み込んだ。

けれど、そんな時間ももうすぐ終わる。だから私はその前に聞きたい事を聞くことにした。

「ねえ……」

「何？」

彼は優しく笑う。

「……伏見君は……夏目、先輩のことが好き、なの？」

私は顔を少し伏せて問いかける。

「いや、別に違うけど」

特に考えた様子もなくすぐに返された答えに顔をあげると、少し困惑した彼の顔が見えた。

「……そうなんだ」

我知らず安堵の声が漏れた。優の言葉を信じてなかったわけではないのだけれど、間接的に聞くのと直接聞くのではやはり安心感が違う。

「それじゃあ、またね」

「……うん、またね」

私の家に到着すると、先ほどの質問など気にした様子もなく彼は今来た道を引き返し始めた。

さっきの質問から私の気持ちを読み取ってくれば嬉しいのだけど、残念ながら彼は鈍感だ。そんな鈍感な彼の後ろ姿を見送りながら、今日は昨日と違ってよく眠れそうだな、と思った。

6 幼馴染みとお勉強

テスト期間中には様々なドラマが生まれる。……主に赤点すれすれの人たちの間で。それは例えば目の前で僕のノートを広げている優のことだったりする。

目が血走っているとはよく言ったものだと思う。元々がどんなふうに使われていたかは知らないけれど、寝不足で充血したうえに、親の仇でも見るような感じでノートを見ている彼女は少し怖い。

「ここつてどうしてこうなるの!？」

しかも、その勢いのままこちらに質問してくる。僕としては3限の数学よりも1限の化学の勉強をしたいのだけど、逆らったら殺されそうな気さえするのでそれもままならない。隣の古川さんに救^{レス}援要請をするのだが、その都度帰ってくるのは苦笑のみ。

「そこは無理に公式に当てはめるんじゃないくて、一度式の形を変えてから……」

貴重なテスト前のひとは過ぎていく。

優は昔からこうだ。小学校の時は夏休みと冬休みの宿題を、中学に上がってからそれはそれに加えてテスト勉強をいつもぎりぎりになってから始めて最終的にぼくを巻き込む。今やっている数学だってそうだ。このプリントさえちゃんと理解すれば50点は取れる、そう言って教師が配ったものを今やっている(正確に言えば、昨日やってわからなかったところを今僕に聞いているんだけど、プリントが終わっていないという点では同じだ)。

僕にじゃなくて女の子の友達に聞けばいいじゃん。そう以前言ったところ、僕のノートは字がきれいで見やすいのだと言われた。それは小学生の頃、夏休みの宿題を見せてる時に字が汚くて見にくいと容赦なく叩かれた故の結果なのだが、それを言っと、じゃあ玲君の字がきれいなのはあたしのおかげなんだね、と訳の分からないことを言われた。

「席着けよー」

まずい、どうでもいいことを考えていたらもうこんな時間になってしまった。優があわてて席に戻っていく……………僕のノートを持つて。

訴えたら勝てるのではないか？ そんなどうでもいいことをまた考えてから僕は意識を化学に戻した。

燃え尽きたぜ……………真っ白にな……………

テスト初日からそんなフレーズが似合っているのは正直どうなんだろうか？

この学校は赤点を取った科目は追試、3つ取ったら親の呼び出しプラス追加課題が出される。中間の時は多少手心が加えられるが、長期休暇のある期末での追加課題は尋常ではない量が課される。あの様子からすると優は恐らく初日から1つ、もしかすると2つ赤^{ベケ}を取ってしまったのだろう。

正直かける言葉も見つからないのだが、僕は彼女の元へ行かなければならない。……………ノートを返してもらうために。

「……………優、大丈夫？」

「……………大丈夫、じゃない……………」

答える声は当然元気がない。

「数学、ダメだったの？」

「……………化学も」

長い沈黙の後に言葉を発した彼女は涙目だった。

『も』というのが表す意味はただ一つ。もう後がない、ということだ。

中学のころは1教科だったものが高校では2教科に分かれる。数学は数1、数Aに、英語はリーダー、グラマーに、国語は現代文、

古典に。まあ、何が言いたいのかというと、彼女の苦手な数学がまだ一つ残っているということ。

ピンポン

—— はい、どちら様ですか？

「伏見玲ですけど」

機械越しの声に僕は自分の名前を告げる。

—— ああ、はいはい、いらっしやい玲ちゃん。今優を呼んでくるから中に入ってちょっと待ってね。

おばさんの言葉通り僕はリビングで待つことにした。

学校が終わってから僕は涙目のまま懇願する優に勉強を教えるために彼女の家へとやってきた。

「お昼はもう食べたの？」

戻ってきたおばさんの後ろには制服のまま眠そうに目元をこする優がいた。

「はい、もう食べてきました」

「えっ?? 何で玲君がいるの!？」

僕の声にひどく驚く優。何でとはまたひどい言い草だと思った。

「ちよっとお母さんっ!! お昼できたら起こしてって言つたのに何で玲君がいるのっ!？」

「だって、あんまり気持ちよさそうに寝てたからしばらく寝かせてあげようと思ったのよ。でもね、優が玲ちゃんが来るって言わなかったのがいけないのよ。来るって知ってたらちゃんと時間どおりに起こしてあげてたのに」

おばさんは頬に手をあてて、しかしあまり申し訳ないとは思ってなさそうだった。

「じゃあ何で玲君が来てるって教えてくれなかったのっ!？」

「そっちのほうがおもしろいかと思って」

…… やっぱ反省とかはしていないようだ。

「ううゝ、とりあえずあたし着替えてくるから! ……ごめんね玲君、ちよっと待ってて」

少し泣きそうになりながらうなつた優は僕にそう言い残すと二階の自室に駆け足で戻って行った。

「……子供で遊ぶのはやめたほうがいいと思いますよ」

「うーん、でもこれも愛情表現の一種だからね」

お煎餅せんべいとクッキー、どっちがいい？　そう言いながら優のお昼ご飯を温めなおそうと席を立つおばさんに、クッキーがいいですと答えながら、勉強ができるのはしばらく後になりそうだなと思った。

「優って昨日どれぐらい寝たの？」

質問に彼女は無言で指を3本たてた。

「3時間？」

「……30分」

あれから秒針が15週ぐらいしてから降りてきた優は、どう形容すればいいのかわからないが、何やら可愛らしい格好をしていた。普段着とは少し違う、そんな印象を感じさせる服装。うつすらと黒ずんでいた目元も軽く化粧をして目立たなくしている。

これから勉強をするだけだというのにそんな格好をしていると、女の子なんだなあ、と少し意識してしまう。きっといくら幼馴染みでも寝起きのだらしない格好を見られてしまったのが恥ずかしかったんだろう。

あれから優がお昼を食べてから彼女の部屋へ向かった。リビングでやれば、という僕の発言は、おばさんと美羽さんに邪魔される、という優の意見により却下された。

部屋の中をあまりきよろきよろしないよう厳命されてから問題集と向かい合って2時間ほど、僕は図書館かどこかに行けばよかったなと後悔していた。

理由は2つ。1つ目は今日の前でこつくりこつくりと船をこいでいる優。彼女はこの2時間ですでに3度ほど記憶が途切れている。2つ目はおばさんと美羽さんの存在。ジューズを持ってきたりお菓

子を持ってきたり、結局リビングでなくとも邪魔は入るということ。せめて一声かけてくれればいいのに毎回コップになみなみと注いで持ってくるため机の上にはコップが8つのっている。その内、空になっているのは1つしかない。

前者はどうにもならないかもしれないけど、後者に関しては外出してれば解決していた。まあ、いまさらいつても仕方のないことだけど。

「……そろそろ休憩しようか？」

僕の提案に彼女はとたんに顔をあげて目を輝かせて大きくうなずいた。

「う〜〜、やっと休憩だ〜〜」

大きく伸びをしてうめくあたし。

「まあ、3回も寝てたけどね」

そんなあたしにあきれたように玲君は口をはさむ。

「あはは……。でもさ、なんでテストなんてあるんだろうね？」

「何、その小学生みたいな質問は」

……。見た目小学生のくせに。言わないけど。

「だって黙ってるって寝ちやいそうだし。別にいいじゃん、ただのグチなんだから」

「勉強教えに来て、そのうэгチまで聞かなきゃいけないの……？」

「いいじゃん。玲君は勉強なんかしなくたって赤点取るわけないんだから。だからかわいそうな幼馴染みを助けるぐらいで文句言わないの」

「はいはい。それでその幼馴染みさんはどうやってたら寝ないようにやる気を出してくれるのかな？」

「何、その言い方」

彼としてはせいっぱい嫌味っぽく言っただつもりなんだろうけど、正直可愛いという感想しか浮かばない。そもそも顔立ちからして自

分より可愛くて、背もちっちゃくて、頭もよくて、なおかつ運動も結構できる。本当に完璧と言ってもいいぐらいなのだ、女の子としては。例えすねたって、怒ったって、嫌味っぽくしたって、結局のところ可愛いという結果に落ち着く。

「……なんで笑うの??」

そんな自分をちゃんと理解してない彼はきよとした感じで首をかしげた。その姿に抱きしめたいなあ、とか思うけどがまんがまん。この幼馴染みは繊細なところがある。最近は女の子扱いされても慣れつつあるというかあきらめつつあるのでそうでもないが、昔は可愛いなどと言われたら地味にへこんでいた彼だ。ここで昔からの付き合いで、今までそういったことをしてこなかったあたしがいきなり抱きしめて可愛いとか言ったら、彼は本格的に落ち込んでしまっただろう。だから、

「まあ、何となくね」

と下手なごまかしをすることしかできない。

「……まあ、いいや。そろそろ勉強する?」

「ええ~~~~、もう~~~~??」

彼の言葉にあたしは不満の声を上げる。というより『勉強』という単語を聞くだけで頭が痛くなり、話している間は大丈夫だった眠気が途端に元気を取り戻したような気がする。

「ほらほら、やる気を出して!」

「……なんでテストなんてあるんだろうね?」

「それはさっきも言ってたよ」

「でも質問に答えてなかったじゃん」

「そんなことどうでもいいからやる気出してよ。赤点取って困るのは優でしょ」

「まあ、そうなんだけどさ。でもごぼつびも何もないんじゃないややる気なんて出るわけないよ」

「さっきも言っただけどさ、何を小学生みたいなこと言ってるのさ」

「だってだってだって~~~~」

まるでだだっ子の様なあたし。なんというか……………脳がゆるんでるときでもないこんなことできないなあ、と不意に思った。

「……じゃあどんなご褒美があれば頑張ってくれるのさ？」

「玲君なんかしてくれるの？」

「だってそうでもしないと勉強しなさそうだし」

僕にできることならね、そう付け加えた彼はあきらめのじんだ、けれど優しい笑顔をしていた。

「……だったらさ、今度の日曜日にケーキ食べに行こう？」

二人つきりで、とは言えないあたし。

「1個おこればいいの？」

「ダメ。2個」

あたしが赤点を取ったって、それはあたしの問題であって彼がここまでする必要はない。

「ん。わかった」

なのに優しい彼は、指でOKと作りながら笑顔を見せる。

彼の笑顔を独り占めできたらどれだけ幸せだろう。そんな子供じみた独占欲を自覚しながら、とりあえず目の前の勉強を頑張ろうと思った。

そのやる気は今から20分後、お母さんとお姉ちゃんが部屋に乗り込んでくるまでは続いた。

#7テスト終了

「それでは」「テスト」「……終了」「おめでとー！」

僕を除いた4人が声を上げ乾杯をする。

「ほら、玲君も！」

「え？ あ、うん」

言われて僕も紙コップをほかの4人に合わせた。

ここにいるのは5人。僕と優とその友達の野々山さん、樋口さん、三輪さんである。

なんでこの5人かと言うと、昨日に引き続き優の勉強を見ることになったばかりは、彼女の家では落ち着いて勉強ができないので図書館にでも行こうか、と教室で話していたところに樋口さんたちがやってきて、なぜか彼女たちを含めた5人で喫茶店で勉強することになり、その関係で今回テスト後の気晴らしに僕も誘われたのである。正確に言えば僕は半ば無理やり連行された。テスト明けの今日は生徒会で招集がかかっていたのだがさぼることになってしまった。きつと次行ったとき会長にいじめられるんだろうなあ……。

昨日コーヒ一杯（お代わり自由）で何時間も居座る迷惑な客をしていた僕たちは、さすがに2日連続で同じ店に行くのはどうかと思いい、別の店にて騒ぐことにした。

選んだ店はバーガー屋。周りには僕たちと同じぐらいの人たちでにぎわっている。その中には同じ学校の制服もあり、例外なくテスト明けの喜びを表している。だから多少うるさくしても大丈夫だ。

男1人に女4人。こういうとき漫画とかでは周りの男が嫉妬してすごい目で見てくるものだ。気になった僕が周囲を見るとなぜかいいものを見たとも言いたげな眼をしていた。当然ながら僕はお人形のようにかわいい女の子を囲む女子高生 という風に見られているとは気付かない。

とはいえ孤立無縁という状況に変わりはなく、僕はなんとなく緊

張しながら照り焼きバーガーにかじりついた。

「あゝあ、玲君。口のところ、汚れちゃったよ」

「えっ、嘘!？」

言いながら左隣りから紙ナプキンを手渡す優に礼を言って受け取り、右隣の樋口さんから

「伏見君、ちよつとこつち向いて」

と言われたので振り向いた。

「じつとしててね」

そういった樋口さんは手に持った紙ナプキンで僕の口元をやさしく拭いてくれた。

ああゝゝ!？ という優の悲鳴と おおゝゝ!！ という向かいからの歓声を聞きながら恥ずかしくなってしまった僕は、顔が熱くなるのを感じてうつむいてしまった。

「あ、ありがとう。樋口さん……」

「いいえ、どういたしまして」

それでも僕はかろうじて礼を言う。

「伏見、ちよつといいか？」

「……何？」

僕は向かいに座る野々山さんの声に顔をあげた。

——カシャッ

視界に入ったのは携帯電話カメラ。

「保存」

不意を突かれた僕は鯉のように口をパクパクさせる。

——カシャッ

「もう一枚」

僕はあわててもう一度顔を伏せて、勘でカメラから顔が隠れるように両手を突き出した。

「ちよつと真琴！ 何やってんのよ!！」

「ん、なんだ優。君もこの写真がほしいのか？」

「そんなこと言っていないでしょ！ 玲君が嫌がってるんだからやめ

なさいよ!!」

ありがとう優。僕はいい友達をもった。

「じゃあいらないのか？」

「っ!!」　べ、別にいらないわよっ!!」

「いや、その目はうそをついている目だ」

「そ、そんなことないわよ……」

「ふむ、まあいい。後で送っておくことにしよう。どうしてもいないというのなら止めておくが」

さてどうする、と付け加える野々山さんに優は

「……」

えっ、黙っちゃうの!?　そこは断固拒否してくれないの!?　少し悲しくなった僕はうるんだ瞳でそつと優を見上げた。

「——!!」

そんな僕の無意識かつ無自覚の行動は彼女の顔を真っ赤に染めた。

——カシャッ

また!?　僕は顔を伏せ、しかしカメラレンズはふさいでいるはずと思い少しだけ指に隙間を開けて見ると

「な、なに撮ってんのよ!?」

今度の被写体は優だった。

「カメラを持つてる時にそんな顔するのが悪い」

その言葉に三輪さんはうなずき、樋口さんはにっこり、僕はノー

コメント。優は

「撮るほうが悪いんでしょ!」

と至極もつともなことを言った。

とりあえず僕はジュースを飲んで一息ついた。

「……ずるい」

そこでポツリとつぶやいたのは今まであまりしゃべらなかった三輪さん。

「何がずるいんだ琴音？」

「……ゆーゆーもミリりんもマコすけもレイっちと仲良し。琴音だ

け仲良くない。だからみんなずるい」

「あらあら、確かにそうね。私たちだけ伏見君と遊んででずるかっ
たわ」

「ふっふっふ。しかし甘いな。この世はしょせん弱肉強食。伏見と
遊びたいなら自ら行動するしかないのだ!!」

拳を高く振り上げた野々山さんの言葉に少しだけ目を見開く三
輪さん。どうやらそれが彼女なりの驚愕の仕方らしい。そのまま何
やら考え込む三輪さん。

ここで少し忘れていたことを。

なに、そのネーミングセンス？　っていつかいつの間に僕にニッ
クネームが??

「……レイっちじゃ、いや？」

「えっ？　読心術っ!？」

「……レイっち分かりやすいだけ」

「うむ、分かりやすいな」

「ええ、そうね」

「あたしも人のこと言えないけど玲君は顔に出やすいよ」
「そうだったのか……」

「……そうだったのかって思ってる」

「」「うん」「」

うーん、これから気をつけよう。

「……これから気をつけようとしてる」

「」「してる」「」

いや、もう勘弁してください。

「……分かった。じゃあ、はい、アーン、ふっしー」

「……えっと、どういうこと??」

目の前に出されたフライドポテト。その持ち主は当然三輪さんだ。

「……レイっちじゃ、嫌なのかなと思って。だからふっしー」

「いや、そこじゃなくて。何でこんなこと、してるの?」

「……自ら行動」

「ふむ、なるほど。さすがだな、琴音」ニヤニヤ

「ええ。私もそうすればよかったわ」ニコニコ

「むっ」ムツツリ

「……アーン」無表情

……なに、この状況？ 身動きできません。

「……やっぱり、琴音だけ、仲良くない？」

じわりとにじむその瞳。涙の気配にあわてる僕は周りに救援要請^{ヘルプ}。

ニヤニヤ。ニコニコ。ムツツリ。変わらぬ状況。

「……………」

いや、事態は悪化していく。感情の読めない瞳に大きくなっていく涙の球。僕は、それがこぼれてしまう前に、

「……あーん……………」

全面降伏をした。

——カシャッ

またもカメラ音。反射的に僕がポテトをくわえたままそちらを見ると、

「……邪魔しないで」

三輪さんがレンズを隠していた。そして、そのまま携帯を取り上げて懷にしまい、次のポテトを手についた。

「……はい、アーン」

ニヤニヤ。ニコニコ。ムツツリ。変わらぬ状況。

「……あーん」

いや、そうではない。

少し嬉しげな三輪さん。

表情としては薄いけれど、ほんのかすかな微笑み。

それは、疲弊していた僕を少しだけ、うるおした。それでも帰るころにはぐったりと疲れていたけど。

「佐川君、おつかれさま」

テスト明けの今日は一時間ほど軽く流すような部活があった。

一年対二年の紅白試合。夏目先輩が俺に声をかけてきたのは、それが終わった時だった。

「は、はい。先輩はどうしたんですか、こんなところで？」

俺の質問に先輩は、二年の先輩にタオルを渡しているマネージャ―を指差した。

「彼女を待っているのよ」

「そ、そうなんですか。じゃあ、退屈だったでしょう、大変でしたね」

「うっん、全然。スポーツとかは私苦手だけど、見るのは結構好きだから」

見るのは好き。それを聞いて心の中でガッツポーズ。

そんな自分を自覚しておかしく思う。自分はこんな人間だっただろうか、いや、違う。しかし、彼女のことを思うと際限なく舞い上がって、そのまま自分がどこにいるのか分からなくなってしまいう気がする。

「そうだ、さっきのゲームかつこよかったよ」

みんな半分ぐらい遊び感覚でやっていた試合。そんな物で褒められても仕方ない。

「あ、ありがとうございます！」

なのに、すげえ嬉しい。

さっきまで走っていた疲れが急速に引っ込んでいくのが不思議に思えた。

#7テスト終了（後書き）

ちなみに、三人娘のフルネーム。

野々山真琴 樋口美理 三輪琴音

本文で外見とか書かなかったのは今のところ自分の中でサブキャラだからです。あとがきで補足するのはあまり好きではないのですが、でも軽く一言。

順番に、ボーイッシュで背高、レイヤー入ったやや長髪のおっとり、不思議なツインテール、見たいな感じです。では失礼します。

#8 生徒会でのこと 前

放課後。僕は一枚の扉の前で立ち止まっていた。上を見上げて書いてある文字は 生徒会室。

昨日休んでしまったので入りづらい。どうしようかな……。このまま回れ右して帰りたくなってくるのだけど、休んだら休んだ分だけしっかりと仕返しをするのが会長だ。

思わずもれるため息。視線も自然とうつむきがちになる。そんな僕の視界が遮られる。

「だーれだ？」

「いた、痛いです日向会長っ！！」

声に一瞬遅れて伝えられる痛みに僕は悲鳴と、問いかけに対する答えを叫んだ。この人思いつきし爪立てたよ。

「ふむ、大正解だ伏見書記。中にいるやつ、ドアを開ける」

「ちよつ、日向会長！？ 正解なら放してくださいよ！ 痛いですって！！」

「ドアくらい自分で開ける。あと、伏見をいじめるな」

その時後ろから声をかけてきたのは、声から察するに月宮副会長だ。彼がそのまま扉を開けるのが分かった。

「可愛い後輩をいじめて何がいけないというんだ、月宮」

「いけないに決まっているだろう、日向」

言いながら二人は生徒会室に入っていく。……僕の視界をふさいだまま。

「だ、だから放してくださいよ！」

僕は少し焦っていた。最初の僕と会長との間には少し距離があった。けれども今は会長が無理に前へ歩いているためか、密着状態せききょうとなっている。要するに何が言いたいかはわかるだろう。思わず赤面してしまうということだ。

「ん？ どうした、真っ赤だぞ。風邪か、伏見書記？」

耳元で甘くささやく。この人絶対わかつてる。

「会長、そろそろやめてあげたらどうですか？」

「そうですね、かいちよ。伏見君がかわいそうです」

「そうだな、会計と庶務がそういうならやめてやるか」

そこで僕はようやく解放され、僕を捕らえていた人を視界に入れる。

ひゅうがあかは

日向朱羽。長身痩軀に尊大な態度な会長。長い黒髪をポニーテールにしてまとめ、大きな丸い髪飾りをしている。自分の中にあるルールに従って生きている人で《やられた分だけやり返す》というモットーを持っている。それがよく表れているのが呼び方で、最初に名字で呼ばれたら名字、名前で呼ばれたら名前、自分のことを会長という役職でしか呼ばなかった相手には同じく役職や部活動名、委員会名、何もない場合は出席番号などで呼ぶようにしている。

そんな彼女の近くに見えるのが、月宮俊哉。つきみやとしや同じく長身痩軀で割と無表情な副会長。常に冷静で頼りになる先輩。

先ほど助け船を出してくれた会計の北野先輩。二年。男。

同じく先ほど会長を止めてくれた庶務の南さん。一年。女。

そして僕を含めた五人が生徒会を構成するメンバーだ。

「伏見書記。昨日はどうして来なかったんだ？」

長机の長辺をくつつけた8人掛けの一席に座ったところで会長が尋ねてきた。会計、庶務もこつちを向いたが、副会長は興味がないようで黙々と書類を見ていた。

「その、ちよつと用事があつて……」

僕はあらかじめ考えておいた言い訳を口にする。

「ふむ、用事か。用事なら仕方ないな。それでどんな用事だったんだ？」

やたら用事と繰り返す会長はなにやら嬉しそうな顔をしていた。例えるなら猫がネズミを追いかけるような。

「え、ええ。なんか祖母が入院してしまったようでお見舞いに行つてたんです」

「入院！？　なんと、それは大変ではないか。それで大丈夫だったのか？」

「はい、検査入院なので」

「そうか、しかしおばあさんが入院とは心配だっただろう」

「は、はい。でも検査入院だということは知っていたので」

「なるほどな。だから生徒会を休み、帰宅後すぐに家族で出かけたということだな」

「はい」

会長は深く思案する。

これはごまかせたと思っただけなのかな……？

「伏見書記」

会長は顔を上げ、言った。

「嘘はいけないな」

「っ！　な、何を言ってる……」

僕の言葉をさえぎり会長は僕にだけ見えるように携帯電話の画面を開いた。

「――！！」

「……はい、アーン」

僕の耳元でささやく会長。画面を彩る映像、それは昨日の一場面だった。開いた口がふさがらぬまま目をパチパチする僕。

「さて、なぜその写真を？」といった顔だな。君は自分が有名人だということに自覚したほうがいいな。私だって往来でこんなことされたらプライバシーとか肖像権を無視して激写してしまうかもしれない。ちなみにこれは私が撮ったものではなくクラスメートからいただいた物だ。何故なら私は昨日生徒会業務をしていたからな、女子とこんなことをしていた伏見書記とは違って。ああ、そうだ。君の姉にも昨日何か外せない用事があったかを聞いておいたんだが、特にないと言っていたな。少なくとも、おばあさんのお見舞いなんてのは」

さて、何か申し開きはあるか。そう付け足し会長は僕を見た。そ

れに僕は

「……すいませんでした」

と答えた。

「まったく、最初から素直に謝っていれば軽くいじめるだけで済んだというのに」

「……いや、そのいじめる、ってところが嫌なんですが。」

「それでは罰ゲームだ。こっちへ来い」

「……何されるんだろ？ とてつもなく嫌だけど向かわざるを得ない。気分は死刑囚。当然死にはしないけど。」

会長の前までやってきた僕は、

「後ろを向け」

会長に背を向け、きる前に羽交い絞めにされ、そのまま会長の膝の上にお招きされた。

「なっ、な、なっ、何をしているんですか！？」

「な、が多いな伏見書記。何って罰ゲームに決まっているじゃないか」

身長差というものは恐ろしい。膝の上に座らされて僕の目線はようやく会長と同じだ。

「こ、こんなことして僕にいったい何の損があるって言うんですか！？」

その言葉に会長は僕の前に手を回し、しっかりと抱きしめるようにした。

「——！！」

「何の損があるかって、そんなの君の反応を見れば充分罰ゲームとして機能しているのは明白ではないか。それに」彼女は耳元に顔を寄せる。「れいちゃんは子供扱いされるのが嫌いだもんね」

常より甘い、いや、甘ったるい声でささやき、そのまま僕の頭をなでた。

僕はぞわぞわっ、と何かが背筋を走ったような気がした。

「おや、伏見書記の体から力が抜けた？」

「れいちゃ〜ん、起きてる〜？」

「は、はいっ！」

我ながらこの声は気持ち悪いと思うのだが、まあ、楽しいからいい。この少年は本当にいい反応をする。

それにしても、肌すごくきれいだな……。

このように間近で見ているとそんなことがよく分かる。それにこの少年、小学生並の身長にくせして顔立ちだけを見ると童顔という訳ではなく、むしろ大人びている。

好奇心に負けて顔を触ってみるとその肌は子供のようにすべすべ。いったいどんな洗顔料を使っているのだ？ 今度聞いてみよう。

「おい、日向」

「何だ、月宮」

声の主を見ると仏頂面をしていた。といっても別に不機嫌という訳ではない（と思う）。こいつはいつもこんな感じだ。

「そろそろやめてやれ」

そしてそのままの表情で、しかし声音だけは伏見書記を心配しているように言う。

「さて、しかしまだ物足りないんだが……」

「いいからやめてやれ。伏見に話しておくことがあるだろう」

ふう、しょうがないか。

「伏見書記、もういいぞ」

そう言っ私は回していた腕をほどく。しかし彼は私の言葉が簡単には信じられなかったのか、ゆっくりと顔だけ振り向いて私を見つめる。私もそれを見つめ返してみる。そのままどちらも目をそらさない。

なんだろうな、この状況は？ まるでこのまま恋でも芽生えてしまいそうではないか。しかしそれも面白いかもしれない、こうやっ

て一時の感情に身を任せてしまうのも。

うん、キスでもしてしまおうか？

「にゅ〜とらるくりあ〜」

冷静に、しかし着実に混乱していた（主観的に）私を現実に戻したのは間の抜けた庶務の言葉と、見つめ合っていた二人を遮る一枚の下敷きだった。

さて、感謝するべきか、残念がるべきか。どうやら未だに絶賛混乱中らしい。

「さっさとしろ。話が進まない」

「うるさい、ハゲ」

とりあえず月宮にやつあたりでもしていつもの自分を取り戻そう。そう決めた。

#8 生徒会でのこと 前（後書き）

思ったようにまとまらず話が進まなかったので続きます。読んでいただきありがとうございます。

#9 生徒会でのこと 後（前書き）

アクセス数が1000を超えたみたいです。正直感謝の極みです。
ありがとうございます！！

#9 生徒会でのこと 後

「おーい、だいじょぶ？」

その言葉に僕は突如覚醒した。どうやら放心していたようだ。気が付くと僕は会長の膝の上ではなくもといいた椅子の上にいた。

「ねえ、だいじょぶだった？」

「え？ あ、うん。大丈夫だよ、南さん」

心配そうな顔をする彼女に笑顔で答える。

それならよかったよ、と彼女は自分の席に戻って行った。

彼女を見送り、そのまま視線を動かすと会長と副会長が何やら言い争っていた。

「俺のいつたいどこがハゲだというんだ？」

「そんなことは自分で考えろ、ハゲ」

副会長は頭痛をこらえるようにこめかみに手を添える。

「……まったく心当たりがないんだが、俺をハゲ呼ばわりする理由を明確に述べてくれないか」

「自分の頭に手を当てて聞いてみる」

副会長のもつともな意見を会長は理不尽に一蹴する。

その言葉に自分の頭^{マシ}に手を持っていく副会長、って本気でっ！？

「お前にはこの黒い髪が見えないのか？ 眼科にでも行って来い」
と思ったら髪をつかんで見せただけだった。

「見えてるに決まっているだろう。ツラだろ、それって」

「そんな訳あるわけないだろう。……北野、わざとらしくおれの頭を見て眼を見開くな」

「見る月宮。お前よりも私を民衆は信頼しているということだ」

会長はまるでナチスの先導者のように手を広げた。ちなみになぜこんな表現を僕が思いついたかという、北野先輩がナチス式敬礼（直立の姿勢で右手をピンと張り、一旦胸の位置で水平に構えてから、腕を斜め上に突き出す敬礼）を会長にしたからである。会長は

それに肘から指先までを挙げる答礼でこの敬礼に応えた。

…… なんとというか、この二人すごいな。

「…… 北野、ちょっとこっちに來い」

人差し指一本で手招きをする副会長。

「なんです、副会長？ —— 痛っ！ 何で殴るんすか！？」

パシッ、とかそういう音ではなく、ゴツッ、といい音がした。

「さすがに女は殴れんからな。ただのやつあたりのようなものだ、
氣にするな」

「…… ふう。会長と副会長ってそういうところ似てますよね」

北野先輩は殴られた頭をさすりながらこぼした。

「おい会計。私をこんなやつと一緒にするな」

「それはこっちのセリフだ」

よくあるセリフを交わし、互いに指差しながら二人は見つめ合った。といっても漫画的にいえば火花が両者の間で散る甘い雰囲気とは遠くかけ離れた殺伐としたものだけだ。

「にゅーとらるくりあー」

それをとめたのは南さんと下敷きだった。

「かいちよーさっさと話すすめましょーよー」

南さんの進言を聞いた二人は、しばらく薄い一枚の壁の向こうをにらんでいたが、互いに示し合わせたかのように同時にため息を吐いた。

全員が座り直して仕切り直し。

「伏見書記以外の者には繰り返しの連絡事項となるが、とりあえず私と月宮を除けばクリスマスパーティーの準備に関して特にすることはない」

「そうなんです、副会長？」

「…… なぜ、私ではなく月宮に聞くのだ？」

…… なんとなくです。

「まあ、いい。実行委員が何か言ってこない限り私が承認の判子を押すぐらいしか仕事はない」

「そうなのか……。まあ、正直僕としては楽なほうがいいから嬉しいけど。」

「ところで、伏見書記には恋人はいないな」

「断定口調で言わないでください。……いませんけど。何でそんなこと聞くんですか？」

「ふむ、それはだな、我々生徒会は全員でクリパに出ようと思っ
ているからだ」

僕は副会長を見た。

「……俺も恋人はいない」

「いや、そんなことを聞いているんじゃないんですが。何でわざわざそんな事を？」

「なあ、なぜ君は直接私に聞かないんだ？」

「人徳というやつだ、日向」

……会長、にらんでますけど。

「こういう行事は人数が集まってこそ盛り上がるものだ。俺たち五人が出たところでスズメの涙ほどの足しになるかもわからんが、枯れ木のにぎわいという言葉もある。いないよりはいた方がましだろう」

「そんなに出る人っていないんですか？」

「いや、そういうわけではないが、何事にも例外というものがある。去年は多く参加したらしいが今年もそうだとに限らん」

そこで副会長は会長を見た。会長は副会長を軽くにらんでから僕を見た。

「それで伏見書記には当日何か用事はあるか？」

「いえ、特に何も」

「では我々生徒会メンバーはクリパに皆出ることを決定しよう。ちなみに衣装は皆でおそろいの物を着るから承知しておいてくれ」

「おそろいって、どんなのを着るんですか？」

尊大にうなずきながらいう会長に僕は疑問を投げかける。

「秘密だ。伏見書記は昨日サボったからな。当日を楽しみにしていてくれ」

しかし会長はそれを投げ返すつもりはないらしく、とても嬉しそうに笑った。

「ほかのみんなは知ってるんですか？」

僕は皆を見回して聞くと

「ああ……」

副会長は会長とは打って変わって悲痛そうな、罪悪感をにじませたようにつぶやき

「……」

北野先輩は無言で顔を横にそむけ

「がんばろうねっ！」

南さんは親指を立てて微笑んだ。

うん、なんだろうね。この隠していることがあるということを隠そうともしない反応は。

「……やっぱり、不参加でもいいですか？」

「ダメだ」

これはすでに決定事項だと念を押す会長に、僕は嫌な予感しかしなかった。

一人で歩く帰り道。私は昨日のことを思い返していた。

「クリパの衣装だが皆で統一した衣装を着ようと思う」

月宮、会計、庶務の順に視線を動かす。伏見書記はいない。そのことに多少のいらだちを感じるものの、今日に限ってはそちらのほう都合がいい。

「日向、なぜわざわざ衣装をそろえる必要がある？」

「なんだ嫌なのか、月宮」

軽く手を挙げて発言する月宮はいつもの無愛想。

「どんな衣装にするんですか？」

会計は軽く困惑。

「~~~~」

庶務は悩みなんて何もなさそうに笑っていた。

「そろえる理由はだな、月宮。そのほうが目立つからだ」

「……目立ちたいのか？」

軽くため息を吐きながら言う月宮。

「ふむ、少し言葉が足りなかったか」

「と、言う」と

「我々生徒会が後期のメンバーに変わってからまだそんなに日にちがたっていない」

「つまり、生徒会メンバーの顔を覚えてもらおうと、そういうことか？」

「ああ、そうだ」

私はうなずいて答えた。月宮も納得したのか、なるほど、と呟いた。

「それで衣装だが、会計はどんなのが着たい？」

「へ？ そんなこと急に聞かれても思いつかないんですけど。決めてないんですか、会長？」

「いや、決めてあるが」

「……じゃあ聞かないで下さいよ」

私の答えに脱力したように呟く会計。

「それで、どんなのにするんですか？」

今さらではあるがこの少女は語尾を伸ばさずに話せないのだろうか？

「どんなのだと思う、庶務？」

「そうですね、昨今のはやりにのっとって、メイド服とかですか？」

「ピンコ」

.....

冗談のつもりだったのだろう庶務の発言に対する私の返答。それは冗談を發した庶務だけではなく、月宮と会計をも凍らせた。

さて、月宮が反論する前に私の考えを述べよう。

「正確には使用人の格好だな。男は執事、女はメイド服を着る。なぜこの衣装を選択したかが皆気になっているだろう。その理由は先ほども言った通り目立つためだ。しかし、目立つためにやたらと華美なドレスを着たらほかの生徒の反感を買いかもしれない。そこで別方向かつパーティー会場にいても不自然でない使用人の格好をしようというわけだ」

自分で言いながらなんとなくめちゃくちゃな理由だなと思う。しかし人間というのは何かしらそれらしい理由が提示されると納得する傾向があるらしい。何かとうるさい月宮ですら何も言えないでいるのだから。

「では、反対の者は挙手を」

上がる手の数は、ゼロ。つまり、可決だ。

「よし、各人自分の服のサイズを書いてくれ。執事服を二着、メイド服を三着手配する」

「ちよつと待て」

さて、ここからが本番だ。

「何だ、月宮」

「今数がおかしくなかったか？」

「なんだ、お前もメイドがいいのか。それならそうと早く言え」
「どうしたらそういう発想になる？」

お前から冷静さを奪うためだよ。

「大丈夫だ月宮。たとえお前に女装趣味があろうと私は気にしないぞ」

私は意識して優しく微笑む。

「……そんな趣味があるわけないだろ」

怒りを抑えながら月宮は言う。

ふふふ。狙い通りだ。

「じゃあ何がおかしいというんだ？」

「率直に言うが、お前が伏見に女装させようとしていることだ」

「ふむ……」

私はそこで間を開けて会計と庶務に矛先を向ける。

「見たくないか？」

何を？ とは言わない。

「見たいです」

一人。

「会計、お前は？」

「いや、見たくないと言えば嘘になりますけど、さすがに可哀想じゃないですか？」

「ふむ、たしかにな」

私は一度うなずき、しかし首を振った。

「だが会計、これは伏見書記が悪いと思わないか？」

「……？」

「もし伏見書記が今日休んでいなければこの場で反対することができた。しかし、彼はいない。つまり彼は全権を我々にゆだねたのだと、そう思わないか？」

「……」

静かに考える会計。そんな彼に私はもう一度問おう。

「見たく、ないのか？」

「……見たいです」

二人目。

「という訳で賛成多数で可決だ。文句はないな月宮」

「あるにきまつているだろう、日向、常識で考える。それに伏見だつて何か用事があつてやむを得ず休んだのかもしれないだろう」

「いや、女と遊びに行つたらしいぞ」

「……。全権をゆだねたといつても常識内のものだろう。女装なんでものは常識で考えれば思い浮かばん」

「思い浮かんだんだから仕方がないだろう」

「お前を常識にするな。それにこれは国会の強行採決と同じだ。世論の反応を考えてみる」

「……。なんか変な例えを出してきたな。反対派不在時の強行採決。まあ、たしかにそうかもしれない。しかし、月宮。」

「この場合、世論は圧倒的に私を支持すると思つんだが……」

可哀そうだという意見は当然あるだろう。しかし私は想像する。伏見書記が可愛らしくメイド服を着て、あまつさえ恥ずかしそうにもしもじしている姿を。

「……」

月宮も同様の想像をしたのかはわからないが、私の意見に反論はなかった。

「じゃあ、メイド服は三着、ということだ」

「いや待て。伏見が嫌だと言つたらどうするんだ？」

「伏見書記なら嫌と言つに決まっているじゃないか」

「……お前、ひどいな」

若干引き気味に言う月宮。

「大丈夫だ。私に考えがある。だから心配するな」

「……いや、別に俺は女装させたいわけじゃないから、俺が心配してるのは伏見だし」

「ああ、そうだ。このことは伏見書記には内緒にしておいてくれ」

「分かりました」

「はい」

私の言葉に承知する会計と庶務。

「日向、一つだけ約束しろ」

「何だ？」

強い視線が私を見つめる。

「伏見がどうしても嫌だと言ったらやめること。いいな」

「ああ、分かった。ただし、その判断は私がする」

昨日の出来事をあらかた思い出し、私は考えを巡らせる。どうやって伏見書記を説得するか。

大体は考えてある。力技ではあるが。

さて、当日が楽しみだ。

#9生徒会でのこと 後（後書き）

ナチス式敬礼は現在のドイツでは処罰の対象です。きっとゴツツと殴られるだけではすみません。

千葉とか愛知の一部の公立高校、各地の私立高校では体育祭とかでやってるらしいです。かしらー、右っ！！というやつ。っていうか自分とこがやってましたけど（若干のアレンジを各団で加える）。

これからもどうか読んでいただけますように。では、失礼しました。

#10 優とのデート? 前

「あのさ、せっかくだから映画も見に行かない?」

「いいけど、おごらないよ?」

というわけで日曜日。

僕は駅の近くの大きな時計の下、噴水の前で待ち合わせをしていた。相手は以前ケーキをおごる約束をした優だ。

僕は頭上の時計を見上げる。ただいまの時刻は九時半。待ち合わせの時間は十時十分。なぜこんなに早く来ているのかというと、待ちきれなくて早く来てしまった、とかそういうのでは当然なくて、いやな予感（姉さん関連）がしたためだ。あのまま家にいたら僕はきつと大変なことになっていた。

時計の向こうには少し厚い雲が広がっていて、普段に比べると薄暗くて肌寒い。冷たい風が横を通り過ぎ、僕はコートの前を軽くかき寄せて視線を下に戻し――

「――うわっ!!」

たところに目の前にしゃがみ込んだ三輪さんがいた。

「な、何をしているの、三輪さん?」

無表情のままの上目使いというのは、可愛いような可愛くないような……。でも、背の低いぼくはそんな風に見られることはほとんどないため何となく新鮮な気がした。

「……コトネ」

「え?」

いきなり自分の名前をつぶやく三輪さん。僕はその意図が分からず聞き返した。

「……コトネが、いい」

今度は自分を指さしながら言う三輪さん。

……どうということ??

「つまりだな、琴音は自分のことを名前で呼んでほしいと言っているのだよ」

「——うわっ!!」

突如背後から聞こえた声に振り向くとそこには野々山さんがいた。

「そういうことだろう、琴音？」

驚く僕を無視して三輪さんに話しかける野々山さん。その言葉に三輪さんは大きくうなずきながら、僕を見つめ続けていた。

「さあ、早く呼んでやるがいい。甘く、切なく、そして狂おしく」

ニヤニヤ

「（じー）」無表情

「ふ、二人ともこんなところで何をしているの？」

僕は逃げてみた。

「待ち合わせだ。そんなことより早く呼ぶのだ。耳元で愛をささやくように、優しく」

「（じー）」

だけど無駄だった。

しょうがない、腹をくくるとしよう。たかが名前を呼ぶだけだ。

それに普段僕は優のことを名前で呼んでいる。今さら女子の一人や二人を下の名前で呼ぶことになんの抵抗があるうか。これから口にすることを考えると顔が少し熱くなってきただなんてただの気のせいだ。

僕は自分をごまかしつつ軽く深呼吸した。

「こ、……琴音、ちゃん」

僕は言った。言いました。無意味に自分を褒めてあげたいです。すると三輪さんは口元に微かな笑みを浮かべ、頬を淡く染めてからうつむいた。

いや、そんなあからさまに照れられてしまうと、さすがにこっちも気恥ずかしさをごまかせなくなってしまうのですが。

さて、いったいどうしたものか？ この気恥ずかしい状況がどうにかならないかと僕は周りを見てみると、携帯を準備している野々

山さんを発見した。ただし、その視線の先にいたのは僕ではなくて、「ちよつといいか、琴音？」

「……？」

カシャッ

三輪さんだった。

「……っ！」

驚いた彼女は一瞬の硬直の後、勢いよく野々山さんの携帯電話を奪い取るうとするのだけど、野々山さんは三輪さんの手の届かない絶妙な位置に携帯を維持する。

ちなみに野々山さんは身長が高く、三輪さんは小柄だ。小柄といっても、当然僕よりは背が高いのだけど……。

ぴよんぴよん跳ぶ三輪さんと、それに合わせて腕の位置を変える野々山さん。それを眺めていると向こうから女の人、樋口さんがやって来るのに気付いた。樋口さんも僕に気付いたようで、やり取りを続けている二人を横目で見ながら僕の方にやって来た。

「こんにちは、樋口さん」

「ええ、こんにちは伏見君。この二人は何をしてるの？」

右手を頬に当てて首を傾げる樋口さんに僕は少しだけ考えて簡潔に言う。

「野々山さんが三輪さんの写真を撮ったからそれを取り返そうとしてるんだ」

「ふーん、そうなの。……あら？」

どうしたんですか？ そう聞く前に僕も気付いた。

三輪さんが野々山さんからの写真奪還をやめて、どこか威圧感を感じる視線を僕に向けていた。そしてそのまま僕の方へとやってきた。

「ど、どうしたの、三輪さん？」

「……名前」

「え？ ああっ！」

ポツリとだけ一言つぶやいた三輪さんは僕のことをじとっとし

た感じで見つめていた。

これは、……もう一度呼べってことなんだろうな。
僕は彼女を見つめ返した。

「ごめんね、琴音ちゃん。今度から気をつけるから」 僕の謝罪に
三輪さん、いや、琴音ちゃんはうなずいてくれた。

「ところで、どんな写真を撮ったの、真琴？」

「ああ、これがその写真だ」

樋口さんの言葉に軽く携帯を操作して画面を見せる野々山さん。
琴音ちゃんはそれを止めようとするのだけど、野々山さんに片手で
動きを抑えられてしまう。

「あら、珍しい」

「そうだろう」

ニツコリ笑う樋口さんに大きくうなづく野々山さん。

「ちよっと貸してね」

そういった樋口さんは返事を待たずに携帯を手を取った。

「いいが、何をするつもりだ」

「うん、ちよっとね。……よし、消去ボタン、と」

「っておい、何してるんだ!？」

樋口さんの言葉に慌てる野々山さん。琴音ちゃんも動きを止めて
樋口さんを見る。そんな二人を見ながら樋口さんは口を開いた。

「これからみんな遊ぶんだから、こんなのは消して仲良くしないと。
ね、琴音？」

「……うん」

写真を消されてやや不貞腐れたような顔をしていた野々山さんだ
ったけど、

「仲良くしないと。ね、真琴」

樋口さんにそう言われると普段の感じに戻っていた。

「そういえば伏見君は何してるの？」

樋口さんは今度はこちらに話しかけてきた。

「優と待ち合わせしてるんだ。そっちは？」

「うん、私たちも待ち合わせしてね、これから遊びに行くの」

「……レイっちも、来る？」

言った琴音ちゃんの瞳に宿る（ように見えるのは）のは期待だろうか？

「いやいや琴音。むしろ我々が付いていこうではないか！」

琴音ちゃんの肩に手を置き強く言う野々山さん。

「あらあら、ダメよ。ねえ、伏見君？」

「まあ、別に僕はいいけど」

僕の言葉に樋口さんは驚きに目を少し見開いた。

「あら、伏見君いいの？ せっかくのデートなのに邪魔しちゃって」

「いや、別にデートじゃないけど」

どこからそういう勘違いをしたのかは分からないが僕は否定した。

「あら、本当に？」

言いながら樋口さんの指差した先にはこちらに駆け寄って来る優がいた。

「お待たせっ……！ ……何で美理たちがいるの？」

吐く息が白く染まるこの冬空の下、彼女はスカートを着ていた、普段はあまりスカートを着ない彼女が。若干厚めのブーツに軽くほどこされた化粧。ピンクのバッグにブレスレット。ダッフルコートの下がどうなっているかは分からないけど

「やっぱりデートなんじゃない」

そう耳元でささやく樋口さんの言葉が正しく思えた。

相手を待たせる訳にはいかない、とか、少女マンガでよく描かれる待っている間のそわそわした気持ちを感じてみたい、とか思っ少し早めに家を出たのに、すでに待ち合わせの相手は来ていた。時計を見上げると時刻は9：55。

なんとなくあてが外れた気がして少しがっかりする。

履き慣れないブーツで走るのは大変なんだけど、時間に余裕があるといえ、相手の姿が見えていながら悠長に歩くつもりはない。あたしは盛大に足音を立てて近付いた。

「お待たせっ！……何で美理たちがいるの？」

待ち合わせ場所には待ち人以外に三人いた。

美理、真琴、琴音。三人ともあたしの友達だ。

その内の一人、美理が玲君の耳元で何事かをささやく。その光景に少しムカツとする。

玲君はいつもと同じ格好をしていた。羽衣さんが選んだ膝まで覆い隠すような真っ白なコートからはジーンズが見える。白を基調としたスニーカーは学校に行くときと同じ物。

こっちは慣れない化粧と格好をしているのに、と不満を感じるのは仕方ないと思う。

「……どうしたの、優？」

そんなあたしの視線に気付いた玲君はあたしの方へ一歩近づいて来る。

「別に。何でこの三人がいるの？」

「それはだな、我々も伏見と遊ぶことになっているからだ！」

淡々と変事をして軽く不機嫌だということをアピールするあたしに答えたのは真琴。

……

「えっ！？」

あたしは声を上げて驚いた。玲君も目を丸くして驚いているみたいだけど、それでも聞かずにはいられない。

「玲君っ、どういうことっ！？」

「えっ？ いや、僕にも何のことだか分かんないんだけど」

詰め寄るあたしにうるたえる玲君。

「ひどいな伏見。さっきは別にいいと言っていたではないか」

なあ、と呼びかける真琴に

「ええ、そうね」

ニコニコと

「……うん」

無表情のままうなづく美理と琴音。

「玲君そんなこと言ったのっ!？」

「え？ たしかに言ったけど」

「何でそんなこと言うのっ!？」

「いや、何でって言われても……」

肩に掴みかかるあたしの剣幕に押されながら変事をする玲君。

「まあ待て、優」

そんなあたしたちの間に割って入ったのは真琴だった。彼女はそのままあたしの耳元に顔を寄せた。

「ほんの冗談だ。本当についていくつもりはないさ。デートの邪魔としては悪いからな」

ニヤニヤと小声で言う真琴。

「べ、別にデートなんかじゃ……」

小声で返そうとしたあたしの視界に入ったのは

「……レイっち、大丈夫？」

心配そうに駆け寄る琴音と

「うん、大丈夫だよ、琴音ちゃん」

そんな彼女に笑って応じる玲君だった。っていうか今、下の名前で呼んだ？

「ねえ、真琴」

「何だ？」

「今、玲君が琴音のこと……」

「ああ、名前で呼んだな」

「……何で？」

真琴はそこで一歩さがり、腕を組んだ。

「そうだな、つまり」

彼女は一度言葉を切り、一層ニヤケ顔にしてから言った。

「伏見のことをマスコットとして見ていないのは優だけではない、

ということさ」

心底楽しそうに言う真琴。

あたしはそんな彼女を、ほっぺがちぎれるくらい引っ張ってやりたいと思った。

#10 優とのデート？ 前（後書き）

サブキャラクターのつもりだった三人。なんか書きやすいのでちよくちよく出てくると思います。

分かりづらい表現等々ありましたらご報告お願いします。読んでいただき誠にありがとうございます！

#11 優とのデート？ 後

「さて、では我々はそろそろ行こうではないか」

そう言って野々山さんは僕と優に別れを告げる。

「それではな、優、伏見」

「それじゃあまた明日ね、優、伏見君」

樋口さんもそれに続く。

「……バイバイ」

野々山さんと樋口さんに手を振る琴音ちゃん。って、あれ？

「琴音ちゃん……？」

僕の言葉に彼女は首をかしげる。

「……どうしたの？」

「いや、野々山さんたちが待つてるけど」

僕の指差した先には一度歩き出した野々山さんたちが止まって琴音ちゃんを待っている。あ、こっち戻って来た。

「どうしたの、琴音？」

「……レイっちについてく」

「あら、ダメよ二人のジャマしたら」

「……コトネ、邪魔？」

「え？ 別に邪魔とかではないけど」

僕が答えるとなぜか優がこちらをにらんだ。

「伏見君は優しいからジャマとか言えないの」

「琴音。二人はこれからデートなんだ」

優が軽く頬を赤らめる。

「……さっきレイっち違うって言った。なら問題ない。オールアウト
ケー」

「なら二人がデートだったらついていくのをやめるのか？」

琴音ちゃんはその言葉にしゅしゅとうなずいた。

「というそうなんだが、優、どうなんだ？」

「な、なんでそこであたしに振るのっ!？」

「だって、さっき伏見に聞いたら違うと言ったのだ。後は優しいないだろう」

うん、まあそうなるのかな。

優は僕をチラリと見て、ほかの人を見て、ということを数回繰り返して、意を決したように口を開いた。

「そ、そうだよ！　これからデートなんだからついて来たらダメっ！」

顔が真っ赤だった。

「という訳だ。琴音、行くぞ」

ニヤニヤと優を眺めていた野々山さんはそう言っただけで、琴音ちゃんをうながす。

「……うん、分かった」

琴音ちゃんはずいぶんそれに従い、野々山さんたちの横に並ぶ。そんな琴音ちゃんを樋口さんが子供をあやすように頭を撫でていた。

「では改めて、また明日だお二人さん」

「また明日ね」

「……バイバイ」

口々に彼女たちは言っただけで並んで歩いて行った。僕はその後ろ姿をしばらく見送ってから

「じゃあ、僕たちも行こうか」

真っ赤になってうつ向いたままの優に声をかけた。

「べ、別にデートとかじゃないからね」

歩きはじめてしばらくすると、優がそう言った。

「あの三人がいたら、その、からかわれたりして大変だから、だからデートってことにして、ついてこないんだってさ。そっちはどうがいいかな、って思ったただだからね」

聞いてもいないのにあたふたと弁明する優の姿は見ていて何だか

面白くって

「……？ 何で笑ってるの？」

「うっん、別に。なんか可愛いな、って思ってる」

「えっ!？」

からかいたくなる。

僕の言葉にさっきよりも赤くなった優は、僕から目線をそらして

「……バカ」

と小さくつぶやいた。

僕たちが見た映画は『壮大な愛のスケールで送る恋愛ラブストーリー』という、『愛』『恋愛』『ラブ』というほとんど意味が同じな気のする単語を3つ重ねた煽り文句のついた物だった。

僕は別の映画が見たかったんだけど、『優が勝つまで続くじゃんけん』の結果、こちらの映画に決まった。じゃんけん7連勝したのは初めてだった。

「一度でいいからあんなセリフ言われてみたいよね」

「言われる方はともかく、あれを言う方はすごく恥ずかしいと思うよ」

そんな訳で僕たちはさっき見た映画の話をしながら喫茶店に入った。

パスタがおいしいことで有名なお店らしく、時刻は一時を回って少し経ったところだけど満席。しかし僕たちは偶然待つことなく窓際の席に座ることができて、しばしメニューとにらめっこして注文した。

「これからどうするの？」

「うっん、服とか見に行きたいんだけどいいかな？ お昼食べてからすぐケーキっていうのはどうかと思うし」

「別にいいけど。でも服見に行くんだったら女の子どうしの方が良くない？」

「いいよ。……玲君の好みも知りたいし」

「ん？ 何か言った？」

「うっん、なんでもないよ。……あれ？」

「どうしたの？」

「あれってリチャード君じゃない？」

ガラス一枚の向こう、指差したすぐ先には女の子連れのリッチがいた。あつ、向こうもこっちに気付いた。

リッチは僕と優の顔を交互に見ると、ニヤリと口元を歪めると、隣に歩いている女の子をうながして店の中に入ってきた。そして僕たちのテーブルへ

「ジャマするナ」

やって来た。

おろおろしながらリッチについてきた女の子は、僕と優の顔をうかがった後、

「お、おじゃまします」

と言って僕の隣に座った。リッチはそれを見て優の隣に座った。

「何しにきたの？」

途端に不機嫌になった優がリッチに尋ねる。

「チヨットそいつのショーカイをナ」

そんな優の反応にニヤツと笑ってリッチは答えた。

中々可愛い顔立ちをした女の子だ。けれどどこかに違和感のようなものを感じる。

そんな僕の視線に気付いたのか、リッチが

「そいつクォーター」

とだけ言う。

「……ああ、なるほど」

僕は思わずそうつぶやいた。

瞳の色。それが彼女はダークブラウンとでもいうのだろう、そんな色をしていた。

ベリーショート of 髪からではよく分からないが、よく見てみると

髪の色もどことなく黒とは違う色に見える。

じつくりと彼女を見ていた僕を見て、優がより不機嫌になったことには気付かなかった。

「あんたの彼女なんか紹介されても仕方ないんだけど」

先ほどよりもトゲトゲしさを前面に押し出している優にリッチは笑いながら答える。

「カノジョじゃねーよ。シンセキだ、シンセキ」

僕と優の視線が彼女に向かう。その視線がを受けとめた彼女は
あさつきおん
「浅月紫音です」

自己紹介をした。

「マ、よろしくタノむわ」

「うん、よろしくね」

リッチの言葉に僕は彼女に笑顔を向ける。

「よろしくするのは、まあいいんだけど。なんであんたは自分の親戚をあたしたちに紹介したの？」

半眼でリッチを見ながら言う優。

「ラインンからうちのガッコーに来るからだ」

優が浅月さんを見る。ただし、リッチのときとは違って笑顔だ。

「へえ、そうなんだ。じゃ、後輩になるんだ。来年からよろしくね」

「あ、いえ、受験するってだけなのでまだ決定という訳じゃなくって、今日はお兄ちゃんに頼んで受験会場の下見に来たんです」

「「お兄ちゃん??」」

僕と優の声がそろつ。そして互いに顔を見合わせて

「あんた……自分のことお兄ちゃんとか呼ばせてんの？」

「変態？」

「いやいや、マテ。ジジヨウも知らずにカッテなこと言つなヨ」

心外だと言わんばかりだ。

「違つなの？」

『レイ……。心底不思議そうに言うのはやめてくれ……。』

思わず英語に戻ったリッチは深くうなだれた。

「違うんです。私がそう呼ばせてもらってるんです」

哀れなリッチを見かねたのか浅月さんが言った。

「その、私お兄ちゃんとかに憧れてた時期があつて、それでずっと呼ばせてもらってるんです」

「へえ、そうなんだ。でもこんな兄とかいても最悪じゃない？」

「タムラ……オマエひどくない力？」

優はその言葉に全くリッチを見ずに首を振った。

「優、ちよつと言い過ぎだよ」

さすがに可哀そうかと思ひ、僕は優をたしなめる。

「……そうね。紫音ちゃんの前で少し言い過ぎたかもしれない。ごめんね、紫音ちゃん」

「なあ、そこはオレにアヤマルべきじゃない力？」

「あはは……。えつと……」

リッチの反応に苦笑をもらした浅月さんの言葉が途切れる。

「ああ、あたし田村優。で、そっちが」

僕は言葉を引き継ぐ。

「伏見玲っていうんだ」

「それじゃあ、優さん玲ちゃん、よろしくお願いします」

笑顔で軽く頭を下げる浅月さん。

……年下にちゃん付け……。

彼女の言葉に僕はうなだれ、優とリッチは肩を震わせて控え目に笑った。

そんな周りの様子に気付かない彼女は天然なのか、さらに追い討ちをかける。

「お兄ちゃんもいいけど、こんな可愛い妹も欲しいなあ」

微笑み、僕の頭を撫でながらぽりとつぶやく彼女に、僕は机に突っ伏してうなだれ、優とリッチは盛大に笑ってくれた。

「えっ？　玲ちゃんどうしたの？　二人とも何で笑ってるんですか？」

困惑する彼女に軽く説明しながら、僕はリッチに対して今度地味

な嫌がらせをしてやることを心に誓った。

説明を聞いた浅月さんは、たっぷり十数秒固まるという反応を見せてくれた。

「今日はよく知り合いに会う日だね……」

「うん、そうだね」

お昼を食べた後に服を見に行った店では姉さんと美羽さんがいた。
「何故黙って出かけたんだ」

「ここで会ったのも何かの縁ですし」

そう言ってフリルがふんだんにあしらわれた服を手近寄る二人からかるうじて逃げ出し、次に向かったアクセサリー屋では古川さんに会った。

アクセサリーを目の前に本の話題で盛り上がっていると、優が不機嫌になったため、そのご機嫌をとるためにネックレスを奢らされた。

水色のガラス玉に飾られた星のネックレス。千円ぐらいの安物だったけど、優はすごく喜んでくれた。

「やっぱり優も……」

何やら古川さんがつぶやいていたけれど、詳細は分からなかった。
古川さんと別れ、本屋に新刊をチェックに行ってみると日向会長が見えた。僕は慌ててきびすを返し、優の手を引いて急いで書店を後にした。

そして僕たちは本日の本来の目的であるケーキを食べに喫茶店『ベルマリー』にやって来た。

「さすがにもう邪魔は入らないよね……？」

「何が、優？」

「うっん、なんでもないよっ！」

——カランカラン

心地よい鈴の音が来客を告げる。

「いらつしやいま……」

出迎える声が不自然に途切れ、店員が笑顔のまま凍りつく。

「……敬吾？」

フリーズ

僕は目の前で硬直している男性を半信半疑で呼ぶ。

アリスに出てくるウサギをイメージした燕尾服。細身のフレームは目付きの悪さを軽減するだけでなく、知的な印象を与えている。

しかし、服装によって雰囲気はかなり変わっているものの、よく通る低い声は敬吾のものだった。

「また邪魔が入った……」

隣で優が悲しげにつぶやいた。

「……明日説明するから」

再起動した敬吾はそう言うと言と僕たちを席に案内した。

今日はいまいち予定通りにいかない1日だった。

映画館では、できたら手をつなぎたい、そう思ってたけど、真琴がデートデートと言うから心のスミに置いて意識しないようにしてた（そうしないと今日1日いつもの自分でいられないと思った）ことをつい意識してしまったのと、拒絶されたらどうしよう、と臆病な心があたしに実行させなかった。

どんな感じの服が好みなのかチェックしようかと思ったらお姉ちゃんやんと羽衣さんに邪魔された。

先日の琴音が羨ましくって、『はい、あーん』の機会をうかがっていたのにリチャードや佐川がいて、どうにもできなかった。

でも

「今日は楽しかったね」

隣で笑ってる彼を見ると

「うん、そうだねっ！」

とてもいい1日だったと思う。

それに上手くいかないこともあったけど、収穫もある。

あたしは首元に手を当て、コートの下、朝にはなかった感触を確かめる。

星型のネックレス。

その場ですぐ付けるのは恥ずかしくて、けれどどうにも待ちきれなくて『ベルマリー』を出るときにこっそり付けてきたのだ。

その点では陽菜には感謝しているのと、少し申し訳ない気持ちがある。

彼女が玲君を好きなのは分かっている。まあ、彼女の場合あまりにあからさまなのでクラスで気付いてない人の方が少ないけど。

友達を応援するあたしと玲君をゆずりたくないあたしとが半々に存在している。

不意に真琴の声が蘇る。

『伏見のことをマスコットとして見ていないのは優だけではない、ということさ』

そう、陽菜だけではない。琴音もだ。琴音も玲君のことが好きなのだ。そして彼女はあたしが二の脚を踏んでしまうようなことを平気で実行する。それがあたしにはすごく羨ましい。

彼は彼女たちをどう思ってるんだろう？

隣を歩く彼は

「あつ、雪だ！」

そう言つて、人の悩みなんて知らずに無邪気に空を見上げる。

あたしもつられて見上げると

「ホントだ……」

クリスマスに向けてだんだん増えるイルミネーションにライトアップされた街に、粉雪の白が加わっていた。それは時折光を反射して、まるで雪自身が輝いているような、そんな錯覚を感じた。

「キレイ……」

「うんっ、そうだね！」

あたしのつぶやきに少しはしゃいだように彼は同意する。

「でもさ、イヴに降ったらもつとステキだよな」

「ねえ、玲君……それって普通女子あたしのセリフじゃないかな？」

あたしは答えながら、心の中で彼の言葉を否定する。

確かにイヴに降ったらステキだ。でも『もつと』ではない、あたしにとつては。

今この瞬間隣に好きな人がいて、一緒にこのキレイな光景を見ている。それはきつと、これ以上ないほどステキなことだ。そう思った。

#12 そんな月曜日 前

冷たい風が屋上を通り抜ける。昨日降っていた雪は今朝も少しちらついていたようで、吐く息は白く染まり、フェンスには薄く霜が降りている。

そんな中、敬吾は寒さなど感じていないかのようにフェンスに手をかけ立っていた。

早朝、熱心に部活動に励む生徒の喧騒が始まりつつある時間に、僕は敬吾に呼び出され、昨日言っていた話を聞いていた。といつても話自体は短く、すでに敬吾は言葉を出し尽くし、フェンスの向こう、遠い空を眺めていた。

クリパのあとに告白をする。その時にプレゼントを渡したい。

言葉にすればただそれだけのこと。けれど、どこまでも真剣な敬吾に僕は、かつこいいとはこんな表情のことを指すのだろう、そう思った。

「優も少し気にしてたけど、どうする？」

「お前から適当にごまかしといてくれ」

じゃあ俺、部活行くわ。そう言っただけで敬吾は屋上から出て行った。

さて、これからどうしようかな？ 始業までに時間はかなりある。

正直すごく暇だ。

勉強でもしていようか、そんな考えが頭をよぎるが今はそんな気分じゃない。

僕は先ほどの敬吾のようにフェンスに手をかけ、遠くの街並みを眺めた。

吐いた溜め息は白く、見上げた空に溶けていく。

あれから僕は特別何かをするわけでもなく、しばらく屋上にたた

ずんでいた。

「でも何でベルマリーなの？」

「なんでって、何が？ 古川さん？」

身体が冷えてきたので教室に戻ってくると優がいたので、軽く嘘を交えて話をした。

「その、佐川君のイメージじゃないと思うんだけど、喫茶店って」

「ああ、それはたぶん玲君が前にバイトしてたからじゃないのかな？」

首をかしげる古川さんに優が答え、僕はそれにうなづく。

夏休みのことだ、僕がベルマリーでバイトをしていたのは。その時に敬吾にお店の人たちが優しかったというのを話したのが、バイト先をベルマリーにした理由だと言っていた。

「そういえばさ、二人はクリパ出るの？」

僕は嘘が苦手だ。これ以上話をしてぼろが出る前に話題を変更しておく。

「うーん、あたしはどうしようかな？」

「私もまだ分かんないかな？」

二人とも首をかしげる。

「玲君はどうするの？」

「僕は強制参加。生徒会は全員参加なんだ」

僕は肩をすくめて答えた。

「じゃあ……私も出ようかな」

なぜか古川さんが突然の参加表明。

「それならあたしも出ようかな。ドレスの申し込みっていつまでだっけ？」

優も途端にそれに追随する。

「確か、今週の金曜じゃなかったっけ？ パンプがその辺にあったと思っけど」

僕は二人の唐突な参加決定を疑問に思いながら教卓の辺りを指差す。

確かクラスに五部ぐらいパンフが配られてたはずだ。

「それじゃちよつと見てくるね」

そう言つて優は席を立ち、古川さんもそれに続いていった。

「……レイっち、大丈夫？」

「わっ!？」

そんな二人を見送つていると、すぐ横から声をかけられた。

「い、いつからそこに!？」

「……今さっき」

声の主は琴音ちゃんだった。っていうか気配とか全くしなかったんですけど。

「琴音は神出鬼没だからな」

僕の口にしていない疑問に答えながら近づいてきたのは野々山さんだった。

「あれ、樋口さんは？」

いつも三人一緒のイメージのある彼女たちなのだが、今日は一人メンツが足りてない。

「ああ、美理はクリパ実行委員の集まりがあるらしい」

へえ、樋口さんて実行委員だったんだ。

「……そんなことより、レイっち大丈夫？」

言いながら琴音ちゃんは心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

「大丈夫って、何が？」

僕は首をかしげながら問う。

「……顔色。少しいつもより悪い」

「ん？ 私にはいつもと変わらないように見えるが……。大丈夫なのか、伏見？」

顔色を少し曇らせたような琴音ちゃんの言葉に、あごに手を添え僕を凝視する野々山さん。

「別に大丈夫だと思うけど……」

なんだろう。屋上で身体でも冷やしすぎたかな？

「……大丈夫なら、それでいい。一応、気を付けて」

琴音ちゃんは心配そうな視線をもう一度僕に送ると、自分の席に戻って行った。

「身体に気をつけてな」

そう言って野々山さんも戻って行った。

『なあ、お前らいつたいなに話してたんだ？』

「あ、リッチ。おはよう」

彼女たちと入れ替わりにやってきたのはリッチだった。

「なんか僕のこと心配してくれたみたいけど」

『心配？ 誰が、誰を？』

「えっと……琴音ちゃんが、僕を」

リッチは僕の返答に目を大きくした。

『お前、今琴音ちゃんって……いや、そんなことよりもあの無表情女がお前を心配……？』

……無表情女って。

「リッチ言い過ぎ、それ」

『何言ってるんだ。現にお前と話してるときだってあいつずっと無表情だったろうが』

「え？」

あれ？ そういえば……。

僕、いつの間にか琴音ちゃんの表情が判別できるようになってる？

『あいつきれいな顔してんのに何考えてんのかわかんねえからな。もったいねえ』

もつと笑えばいいのに。リッチが言いたいのはそういうことだと思う。

そしてそれは、僕も以前思ったことだった。

——キーンコーンカーンコーン

『おっと、席戻るわ』

リッチだけでなく、クラスの皆も慌ただしく自分の席に戻っている。チャイムに遅れること数十秒、教室の扉が開いた。

「よし、皆席つけよう。テストの結果返すからな。それと後で別に呼ぶやつら、覚悟しとけよ。大体自分で分かっているだろうからな。」

やや大きめの声量で言いながら入ってきたのは我がクラスの担任、高村先生だ。

「浅井、岩月、上田、……………」

朝のホームルームを省略して成績表を配る担任。

俄かに活気づくクラスの中に、極端に暗くなる一部の者たち。そんな彼らのほとんどが名前をもう一度呼ばれ、担任共々廊下へと出ていく。

「ねえ、あれってなんで呼ばれてるの？」

友人連中と順位を見せ合ってから席に戻った僕は隣人の古川さんに尋ねた。

「あ、えっと……………追試の人たち……………」

彼女は言いづらそうに答えた。

……………優。ご愁傷さま。

僕は廊下へと消えていった友人に向かって手を合わせた。

「玲君っ！ 今日暇？ 明日明後日暇！？ っていうか23日まで暇っ！？」

叫びながら廊下から戻ってきた優は、私の隣、伏見君の席に突撃。バンッと机をたたく大きな音に伏見君が少し驚いている。

「い、いきなりどうしたの？」

「追試っ！ 23日なのっ！」

イスごと後ずさる伏見君の眼前に、持っていたプリントを突き出す優。その勢いに彼の机がガタンと揺れる。

「そんなに近いと見えなんだけど……」

言ってプリントを手に取った伏見君は軽く紙面に視線を送る。

「へえ、一日で全部やっちゃうんだ」

「そうなのっ！　しかもあたしが受けるやつ連続なんだよ」

優はバンバンと再度机をたたき、勢いよく伏見君の手を握る。

「お願い、玲君。勉強教えて」

優が詰め寄った瞬間、

——キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、

「わ、もうこんな時間。じゃあ、頼んだからね」

優は伏見君の返事も聞かずフェードアウトしながら席へと戻って行った。

それとほぼ同時に教師が入ってきた。

「ねえ……、どうするの？」

号令の後、私は声を潜めて話しかけた。

「うーん、まあ、生徒会がない日なら別にかまわないかな」

「ふーん。……それなら、私も手伝おうか？」

「えっ？　いいの？」

「うん。人数が多いほうが教えやすいと思うし」

それに今さらなのかもしれないけど、優は伏見君のことが好きかもしれないと気付いた今、彼らを二人きりにしてしまうのは抵抗がある。

「じゃあ、後で優に伝えとくね。古川さんも勉強教えてくれるって」

伏見君はそう言うのと会話を打ち切る。先ほどから先生がちらちらとこちらを見ていたからだ。

私は彼に向かって頷くと、ようやく机の上に教科書を並べた。伏見君と過ごす時間が増えたことを、こっそりと喜びながら。

#12 そんな月曜日 前（後書き）

ずいぶん久しぶりの投稿となりました。楽しみにしていた方、いたしたら申し訳ありません。

長期休暇というものは人を墮落させますね。何もすることがなくて暇にもかかわらず、かといって何もしたくありません。

今回のお話。前後編になっておりますが、話が続くというより、同じ日というだけです。あしからず。

サブタイトルが特に思いつかなかったことも長々と期間が開いた小さな一因となっております。

では、何の身にもならないあとがきにまでお付き合いいただけた方、ありがとうございます。失礼いたしました。

#13 そんな月曜日 後

——キーンコーンカーンコーン

さて、昼食の時間。僕はいつものように敬吾とリッチと学食へ向かうつもりだった。

けれど、そんな僕の机の上にチェックの布に包まれた謎の物体が置かれた。僕は困惑しながらその楕円形の物体を置いた人物をみる。「えっと……琴音ちゃん。これは何？」

僕の至極真つ当と思われる質問に、やれやれ、とでも言いたそうに答えたのは彼女の両脇にひかえていた二人だった。

「それはだな、伏見。一般的に弁当と呼ばれるものだ」ニヤニヤ。「しかも正確に言うと手作りのお弁当なのよ」ニッコリ。

それはささやかながらも爆弾投下ともいえる発言。大爆発こそしなかったものの、あちらこちらに飛び火してささやき声の多重層が始まる。

——あの二人って、そういう関係だったの？

——いつのまにー？

——っていうか、三輪さんでもそういうのに興味あったんだ……。

——いや、玲君はみんなのものなのに。

——いやいや、正確に言うんだったら愛妻弁当だろう。

——あらあら、それは少し気が早いわよ。

ちなみに最後の二つは野々山さんと樋口さんだ。

「……どうぞ、召し上げれ」

頬を赤らめ、かすかに弾んだように琴音ちゃんが言うと、またもクラスのあちこちで小声の会話が成される。

——おい、あの三輪が照れてるぞ！

——…これは、夢か？
——恋つて、すごいんだね……。
——うわっ、上田がなんか寒いこと言ってるよ……。
——ふむ、思わず激写してしまいたいな。
——あらダメよ、大事なところなんだから。

その時、極寒の風が吹いた。少なくとも僕は、そう感じた。
真横から。
教室の後ろのほうから。
同時に。

慎重に真横を見てみると、表情という表情が抜け落ちた様子で僕の机の上を——お弁当を凝視する古川さんがいた。それからぎこちなく後ろを振り向くと、不機嫌であると疑いようもない優がこちらをにらんでいた。もしも視線に物理的作用があったら……、と考えてしまうほどに。

（敬吾、助けて）
アイコンタクト
僕は親友に救援要請。

（すまん。無理）

しかし敬吾は普段見せることのないさわやかな笑顔を僕に返すと、リッチと連れ立ってあっさり教室を出て行った。

「ちよつと、待つ……」

僕はガタンと音を立てて二人を追おうとする。けれど、

「待つのは君だろう、伏見」

「無視して行くっていうのは人としてどうかと思いますよ」

野々山さんと樋口さんに両側から腕を掴まれた。

「では、どこへ行く？ 屋上か？」

「屋上は今の時期は寒いでしょ。別の場所にしましょう」
言いながら僕を連行する二人の手にはいつの間にか各自のお弁当。

「……温室がいい」

そんな僕たちの後ろを琴音ちゃんが二つお弁当を持ってついてくる。そのうちの片方は、ついさっきまで僕の机の上にあったものだ。僕はなすすべもなく、教室から連れ出された。

「ちよつ、ちよつと待って。自分で歩けるから、引つ張らないで」
僕は抱きかかえるように腕を引つ張る二人に訴える。

「ふむ、そんなこと言って、離れたら逃げてしまいかもしれないではないか」

「そうね。さっきも佐川君たちのところに行こうとしてたし」
しかし僕の訴えは満場一致で棄却された。

「分かったから。逃げない、だから離して」
けれど僕はもう一度懸命に訴える。

「どうした伏見。目立つのがそんなに嫌か」
「分かってるなら離してよ！」

ニヤニヤ笑う野々山さんに僕は小さく叫ぶ。そう、先ほどから僕たちは多くの好奇の視線を集めているのだから。

「あらあら、せっかくの両手に花だというのに何が不満なのかしら？」

「だから目立つのが嫌なんだってっ！！」

「でも小さく叫ぶ僕だったけど服をささやかに引つ張られたので、唯一自由の利く首を振り向かせる。」

「琴音ちゃん、どうしたの？」

その問いかけに琴音ちゃんは少し伏し目がちに、ぼくとその両脇の二人に交互に視線を送り、口を開いた。

「……琴音も、レイっちとくつつきたい」

僕は思わず歩みを止め、左右の二人は僕の頭上で視線を交わす。

そして野々山さんはニヤリと口元を歪めて、

「よかつたな伏見。こんな可愛いこと言ってくれる女子がいて」
樋口さんはニツコリと笑って、

「きつとこういうのが男冥利に尽きるっていうのね」
と僕の耳元でささやく。

今更ながらに主張したい。

なに、この状況？

「……おいしい？」

「うん、おいしい。琴音ちゃんって料理上手なんだね」

「……別に、ただいつも作ってるってだけ」

手渡されたお弁当は普通においしかった。

「そうだろうそうだろう。レトルトなんて一切使わない完全手作りだから」

なぜか自慢そうに胸を張ったのは野々山さんだ。

「琴音ったら昨日ね、お弁当の中身なにがいいか？　って電話してきたのよ」

やたら嬉しそうに言う樋口さん。でも、普通そういうのは黙っておくものじゃないかな。ほら琴音ちゃんにらんでるし。

現在僕たちは温室——一辺30メートルほどの正六角形状をしたガラス張りの建物で、中の管理は園芸部が行っている——の一角、芝生の上に琴音ちゃんが持参していたレジャーシートの上に座ってお昼ごはんを食べていた。

僕は改めて楕円形のお弁当箱——琴音ちゃんとおそろい——を見る。

二段構造のそれは、一段目には五目稻荷寿司が詰められていた。

二段目には、きれいに焼けた卵焼き、千切りのキャベツの上にはミニハンバーグが二つにアスパラのベーコン巻き、ポテトサラダの横には真っ赤なプチトマト。それらが所狭しと並んでいた。

ちなみに琴音ちゃんのお弁当も同じ構成——分量は僕のより少な

め——で、それが余計に僕を気恥ずかしくさせた。

僕は卵焼きを口に入れる。甘い味付けが口の中に広がる。

「……塩味のほうがよかった？」

「うっん、そんなことない。おいしいよ」

先ほどから琴音ちゃんは僕が食べるたびに感想を聞いてくる。その度に僕はおいしいと答えているが、それは嘘でもお世辞でもなく、まぎれもない本心だった。そして琴音ちゃんは僕の答えを聞くたびに、安心したようにささやかな笑みを口元に浮かべていた。

昼食の時間は、気恥ずかしくはあるものの、何事もなく楽しく過ごした。

放課後、私は彼女を呼び出した。

「それで、話って何なの？」

場所はカフェテリア。

「そうだな。宣戦布告、といったところか」

私は頼んだホットコーヒーをブラックのまま口に入れる。

「……どうということ？」

この場に向かい合うのは私と彼女の二人。本当は陽菜も呼びたかったが、図書当番ではしうがない。付け加えるなら、琴音は園芸部、美理はクリパ実行委員でここにはいない。

「優には悪いが私は琴音を応援するから」

優が伏見を好いていることは分かっている。その気持ちがおそらく私たちが伏見と出会う以前から持ち続けているものであるということも。

「……琴音は、なんで玲君なのかな？」

優は手元のカップに視線を落としていった。彼女ははまだ、そのカップに口をつけていなかった。

「さあな。私は琴音じゃないから分からんな。だけど……」

私はそこで言葉を切り、コーヒーをもう一度口に含む。

「伏見には琴音を選んでほしいと思っている」

私にしては珍しく真摯な言葉。

「……珍しいね」

そんな私を見て、優は軽く驚いたようにした。

「何がだ？」

「真琴はなんて言うか、その、……こういうことは遠くからニヤニヤ笑ってるだけってイメージがあったから」

「……君は私を何だと思ってるんだ？」

私は思わず眉間にしわを寄せる。けれど、その評価は特に間違いというわけではない。これに琴音が関わっていないければそうしてただろう。……自覚していることとは言え、そのような評価を面と向かって言われるとは思ってもみなかったが。

「優は琴音のことどう思う？」

「急に何？ っていうかどういいう意味よ？」

「ふむ、言葉通り何だが。……そうだな、言い方を変えよう。琴音は無表情だと思わないか？」

「……まあ、否定はできないけど」

「私や美理は付き合いが長いから琴音の表情が分かる。でも優はそうではないだろう？」

「まあね。……あたしにはまだよく分からない」

優はバツが悪いのか、目をそらして答えた。我ながら嫌なことを聞いていると思う。

「別に優だけじゃなくほとんどの連中がそうなんだろう。でも、伏見は違う」

今日の昼間、いや、それ以前も含めた二人のやり取りを見ていて確信したことがある。

「伏見には琴音の表情の変化が分かっている」

「……ホントに？」

優の瞳が大きく見開いた。私は小さくうなずく。

「それに琴音は伏見と一緒にのときは分かりやすい反応をする時がある」

それは教室や昼食の時に特に顕著に表れていた。

「私はな、それがすごく嬉しいんだ」

「……真琴？」

優は私を怪訝そうに見てきた。そんな優に私は苦笑を返す。

「優は、琴音が昔からあんな風だったと思うか？」

「……………」

優は答えない。それもそうだろう。誰だって、子供のころは泣いて、叫んで、笑うものだ。何か特別な事情でもない限り。

もしかしたら優はもう私は何を言いたいのか分かっているかもしれない。というのは少々買いかぶりすぎだろうか？　なので私は言葉を紡ぐ。

「私はな、すごく嬉しいんだよ。今の琴音を見ると、昔の琴音を思い出すから」

今、だとか、昔、だとか。そんな定義づけに何も意味がないことは知っている。今の琴音も昔の琴音も、結局のところ同じ琴音なのだから。それでも――

「私は自分の気持ちに不器用になってしまった彼女には、もっと素直に、分かりやすく笑っていてほしい。そう、思う」

「真琴……………」

心情を吐露した私に優の視線が向く。

「やれやれ、私としたことが真面目に話しすぎだな」

そんな視線を払うように私はかぶりを振る。せめて最後だけはいつものスタンスで行かせてもらおう。

「優」

すっかりぬるくなったコーヒーをあおると、私は意識して軽い調子で呼び掛ける。

「伏見は琴音がいたからな」

そして私はニヤリと口元を歪めるのであった。

#13 そんな月曜日 後（後書き）

最近すごく更新の早い、というか短期間にに何話も掲載している作品をよく見かけ、すごいな、とか思います。きつとすでにかなりの量ができているんじゃないかな。

自分の場合その場で書いているので、ゆっくりとした更新です。次の投稿がいつになるかわかりません。

そんな作品ですがこれからもお付き合いいただけたら、と思います。それではこんなところまで読んでいただいた方、ありがとうございました。

#14 夢という形の過去話

脳内にドンドンドンと断続的な痛みが居座る。まぶたは重く、ようやくの思いで目を開くと見慣れたはずの天井がぼやけて視界に映った。そのまま数秒天井を見つめるも、視界は明瞭になるどころかますますかすむ。

やばい。なんかもう、この上ないほどつらい。

「だ、大丈夫かつ、玲!？」

珍しく動転してる姉さんの声が頭に響く。

「39度ちょうど。完全に風邪ね」

冷静に、けれど心配そうに続けたのは母さんだ。

「……正直、しんどい」

僕は正に息も絶え絶えといった状態で姉さんに答えた。声もかすれてちよつとハスキーボイス。

「そ、そうか……。でも安心しろ! 私がつきつきりで看病してるからなっ!」

姉さんのありがたいお言葉。正直涙が出そうだ。嬉しさと、……それ以上に頭に響く痛みによつて。

「姉さん……もうちよつと静かに……」

正直声を出すのもしんどい。

「あ、ああ。すまない」

「それと、看病はいいよ……」

「な、なぜだっ!？」

あうっ……頭が……。

「羽衣ちゃん、静かにね」

顔をしかめた僕を見て、優しく姉さんをたしなめる母さん。

ばつが悪そうに口をつぐんだ姉さんは、それでも視線で僕に理由を問いかけていた。

「だって姉さん今まで皆勤でしょ……なのに僕のせいで休んじゃう

なんて嫌だよ」

「別にそんなものどうだっていいじゃないか」

姉さんは首を横に振った。

「ダメだよ……だってはじめてじゃない。皆勤賞なんて」

僕は小学校の半分以上を、姉さんはそれに加えて中学の一年をイギリスで過ごした。だから姉さんにとって皆勤賞というのはこれが最初で最後の機会だ。なのにそれを僕のために不意にしてなんてほしくない。

「本当に皆勤なんかどうでもいいんだがな……」

姉さんは苦々しくつぶやき

「……一日」

人差し指を立てて僕の目の前に持ってきた。

「一日で風邪を治すこと。そうでなかったら明日は何がなんでも休んで看病するから」

「……うん。頑張る」

心配そうに僕を見つめる瞳。それに僕はニッコリと微笑み返した。

「辛かったらいくらでも電話しろ。学校なんかいくらでもサボるから」

「お粥作っておいたから。食欲あるようだったら温めて食べてね」

二人を見送った僕は冷却シートと氷枕の世話になりながら、ゆるやかに意識を手放した。

赤ちゃんの手の平に乗るような、小さな淡い水色の巾着袋。それを見て僕は懐かしく感じた。

物心ついた時には既に持っていて、母さんにも大切にするように

言われてた。中には紫水晶の原石が入っていて、それを見るとなぜかひどく安心したのを覚えている。

そこまで思考が巡って、今、自分は夢を見ているのだと気付いた。常に肌身離さずにと言っていたいいほどに持っていたお守りのようなもの。けれど、それはずっと昔、小学2年の頃に手放したもので、既に手元から失われてしまったのだから。

不意に景色が変わった。

巾着袋を固く握りしめて、涙の跡を残しながらも必死に笑う少女。少女はとても感情豊かで、喜怒哀楽がはっきりしていた。

僕はこっちゃんと呼んでいた。

こっちゃんよりも少し背の高い女の子。姉である彼女は僕と二つしか変わらないのに、やけに大人びてみえた。

僕はらいさんと呼んでいた。

今はもう顔もよく思い出せない少女たちはどうしているだろうか。少女たちと出会ったのは小学2年の夏休み。

当時、ようやく自転車に乗れるようになった僕は、過保護な姉さんを振り切ってよく遠出をしていた。一度も迷子にならなかったのは、今思えば運がよかったのかもしれない。

7月も終わり、8月に入ったある日のことだった。

自転車をこいでいる最中にチェーンが外れた。

僕はとても困った。突然ペダルに抵抗を感じなくなり、前につんのめりになって危うくこけそうになりながら自転車を降りた。それは僕にとって初めての事態で、対応策などみじんも浮かばずに、ただひたすらに困っていた。

そんな時だ。姉妹が通りがかったのは。

お姉さんのほうは、半泣きになっている僕に優しく笑いかけ、油に手を汚しながら不器用にチェーンを直してくれた。そして「もう大丈夫だよ」と再度笑って去って行った。

それに僕は射ぬかれた。

有り体に言ってしまうえば初恋だった。といっても当時は気付かな

かったけど。

まあ、自覚していようがいなろうが色恋沙汰というものは人を行動的にするもので、次の日から僕はその辺一帯を自転車で散策することにした。

お昼ご飯を食べたら出かけて、汗だくになって夕方に帰宅する。そんな風に4日が過ぎ、5日目のことだった。少女たちと再会できたのは。

今思えば奇跡に近い出来事だと思う。名前も住んでいる場所も知らない人を探し出せたなんて。

公園で遊ぶ二人になけなしの勇気で話しかけ、毎日のように遊ぶような仲になつて。夏休みが終わっても日曜日は3人で遊んで。2人のことは姉さんや優には秘密にして、だって女の子に会いに行ってるなんて言えなくて、そのせいで二人が不機嫌になることもあったけど、それでも会いに行くのはやめなくて。10月になると遊び仲間が一人増えて、僕はまーくんと呼んでいて、彼は僕が名前を呼ぶたびに愉快そうに笑って。

そんな日々が半年間続いた。

半年で終わった。

理由は父さんの転勤。行先はイギリス。もう気軽には会えないなんてことは明白だった。

別れを告げた日。まーくんはいなかったから、こっちゃんといさんにさよならを伝えた。

もう会えないと告げると、こっちゃんは涙目になった。問われるままに理由を話し終える頃には少女はボロボロに泣きくずれていた。らいさんはその間ずっとこっちゃんの肩に優しく手を置いていた。

僕は少女に泣きやんでほしくて、だから僕の一番大切なものをあげることにした。

アメジスト

紫水晶の原石が入った淡い水色の巾着袋。物心ついた時には持っていて、母さんから大切にしよう言われてたお守り。

迷いはなかった、といえば嘘になる。それは当時の僕にとってま

さしく宝石のごとく大事にしてたから。

けれど、どうしても少女の涙を止めたかった。

僕の好きな人はいつの間にか少女になっていたのかもしれない。
今となつてはもうはつきりしないけれど。

こっちゃんにお守りを手渡すと、少女はお返しにと、身につけていた腕時計をくれた。それは少女が最近手に入れたばかりの、自慢にしていたものだった。

私たちも交換しましょ。らいさんはそう言つて髪を縛っていた赤いリボンをほどこいた。僕も髪を縛っていた——僕は姉さんと母さんの趣味によりポニーテールだった——水色のリボンをほどこいて、互いに髪を結び合った。

夢が覚めた。

内容ははつきりと覚えている。続きも容易に思い出せる。

それはとてもとても懐かしい、そしてほんの少しの寂しさを伴う
思い出。

最後はなんとかみんなで笑い合つて別れた僕は、お守りをあげて
しまったことを母さんにひどく怒られた。今すぐにでも返してもら
つてきなさいとまで言われたけど、僕は決して首を縦に振ることは
なかった。そんな僕を見て、母さんがひどく悲しげに瞳を伏せたこ
とが印象的だった。

それから僕は腕時計とリボンがボロボロになるまで常に身に付け
た。

久しぶりに取り出してみようかな。少し考えたけど頭を振つて感
傷を振り払う。その揺れに脳が悲鳴を上げた。その痛みに記憶の欠
片がこぼれおちる。そういえば——

「こっちゃんたちも僕のこと、レイっちって読んでたっけ……」
言葉にして呟くと、のどがかさついた。水がほしいし、僕の身体

はささやかに空腹を訴えている。

時計を見てみると、時刻は四時半。そろそろ姉さんが帰ってくるころだ。

そのとき階下で物音が聞こえた。樽をすれば、とやらだ。

出迎えついでに水を飲みに行こう。体を起こすと少しふらつくような気がしたけれど、僕は立ち上がり階下に向かった。

「ふむ、ここが伏見の家か」

「……来るの初めて」

「あらあら、だったら今夜はお赤飯ね」
「なんでだ。」

思わず出かかったツツコミを飲み込みつつ、あたしは集まったメンバーを見渡す。

物珍しそうに伏見家を見ている真琴と琴音と美理。念のため断わっておくと、ごく普通の2階建ての一般住宅で珍しい要素はない。

その近くには、住宅に背を向け、手のひらに人の字を書いて飲み込んでいる陽菜の姿。何ともまたベタなことをしているものだ、と呆れてしまうのは仕方のないことだと思う。

それにあたしを加えた5人が本日のお見舞いのメンバーだ。

「では優、鍵を開けてくれ」

ようやく見飽きたのか、真琴があたしに催促し、あたしはカバンから鍵を取り出す。

これは羽衣さんがどうしても外せない緊急の用事が入ったため泣く泣く姉に渡したものを、さらに姉があたしに託したものだ。

ちなみに姉にはとくに用事も何もない。あたしが玲君に会えるように配慮、要するにチャンスを与えているのだ。姉は頼んでもいないのに妹の恋を応援している。惜しむらくは、応援と同等、いや、それ以上にからかつてくることだろう。

今日だって普通に鍵を渡してくればいいのに、わざわざ教室のみんながいる前でお見舞いに行け、だなんていうからこんな大所帯になってしまった。

「あ、でも、鳴らさなくていいのかな？」

インターホンを見ながら陽菜が言った。ひどく緊張しているのか、妙にそわそわしている。

「……レイっち、寝てるかも」

「そうね。下手に起こしちゃうのも嫌だし、優に返事も来てないんでしょ」

「うん」

学校であたしはメールを何回か送った。玲君の性格だと返ってくるはずだから、多分寝ていてメールに気付いてないんだと思う。

「という訳で、優、開けてくれ」

再度真琴が促す。

あたしは鍵穴に鍵を差し込み、一回転。

カチャツ、と小さな音がして、そのままドアを開ける。

「おじゃましまーす……」

起こさないようにやや小声で。

「お帰り、姉さ……ん？ 優？ それに、みんなも？」

だけど、それに返す声が頭上から降ってきた。玄関すぐ近くの階段からあたしたちを見下ろす玲君。

「おいおい、私たちは優のおまけではないぞ」

真琴は軽口をたたきながら何の遠慮もなく中にあがりこむ。

「……レイっち、元気？」

「お邪魔するわね」

それにくる琴音と美理。

「うん、えつと……どうしたの、みんな？」

「その、お見舞いに来たの」

玲君の疑問に答える陽菜は、いまだどこかそわそわしている。
「今日の分のプリントとか持ってきたから」

「ありがとっ、優」

玲君はそう言って階下に一步踏み出し、ふらついた。

「えっ……?」

もれた呟きは誰のものか。踏み出した足は何も踏むことなく、玲君は宙に身を投げ出し、

「わ、わ~~~~っ!!」

落下地点にいたのは陽菜だった。いくら玲君の体重が女の子並みとは言え、典型的文化系の陽菜が受け止めたり支えたりなんてできるはずもなく。

「きゃあっ!」

向かい合った形で二人は倒れこんだ。

「ふむ。これでキスでもしてくれればお約束、といったところなんだが……いや、これはこれでお約束なのか?」

玲君は陽菜の胸に顔面衝突。

「……レイっち、大丈夫?」

彼はそのまま意識を失っていた。

「せっかく胸があつたのに気絶するなんて……」

なぜか残念そうな美理。自分の胸をクッション呼ばわりされた陽菜は赤くなっていた。

ちなみに陽菜は着やせするタイプで、あまり目立たないけれどクラス的女子から羨望のまなざしを受ける対象となっている。

「れ、玲君だいじょうぶっ!?!」

唐突な出来事に驚いたあたしは、遅ればせながら悲鳴を上げたのだった。

#14夢という形の過去話（後書き）

……ずいぶんと久しぶりの更新です。お読みいただいている方々、申し訳ありません。自分だったらこの間に話の内容を忘れること必至です。

さて、話は変わりますが。3600字の話があります。一文字打つの一秒かかるとして、3600字で一時間。それだけの時間があればいろいろなことができます。

まあ、何が言いたいという。……更新早い人ってホントにすごい。さらに、長期にわたっての連載作品で定期更新、もしくは予告しての更新をしている人はもつとすごい。

趣味の一環なんで苦になるというものでは決してないですが、長時間画面に向かっているとどうしても疲れてしまうし、ほかのこともしたくなる。

自分の場合、文字を打つのに慣れていないためかなりの時間もかかってしまいます。……ブラインドタッチ、できるようになりたいなあ。

さて、次回はこの後、お見舞いの話。文章としては形になっているので、あとはアナログからデジタルに変換すること。なので、すぐとまではいきませんが近いうちに更新したいと思います。
では、長々と失礼しました。

#15 騒がしいお見舞い

「れ、玲君、だいじょうぶ……!?」

「うつ……頭に響く……」

抱き起こされて全身をがくがくと揺さぶられる。それは耳元で出される大声と相乗効果で僕の頭痛に多大な影響を与えた。

「あつ、気がついた! 大丈夫、玲君?」

「だから、頭に……」

現状を訴えきる前に唐突な浮遊感。

「えっ……?」

視界に野々山さんの顔。

「悪いが運ばせてもらっぞ。部屋はどこだ?」

「あ、階段登ってすぐのとこ……」

……簡潔に言おう。決して客観視したくない事実だが、しょうがない。

僕は今、お姫様だっこをされている。それも、クラスメートの女子に。

これは一体どんな罰ゲームだろう。運んでもらってる身分で言えることではないかもしれないが、男の尊厳とかそういうのがこっそりと持っていかれる気がした。

僕の寝る自室のベッド。その周りにイス、クッション、足りない三人には悪いけどそのまま床に座ってもらった。

「今日はみんなわざわざ来てくれてありがとうね」

僕は身体を起こして言う。

「玲君、寝てたほうがいいよ」

心配そうに優が言って、古川さんと琴音ちゃんがうなずく。野々

山さんと樋口さんはそのうち物色でも始めそうな勢いで部屋を見回している。

「うん。でも大丈夫だよ。朝に比べたらずっと楽になったから」

ピピピツとその時、脇にはさんだ体温計から電子音。自分で確認してから優に手渡す。

「37度4分。だから大丈夫だよ」

僕の言葉に優の手元、体温計を覗き込むほかの4人。

そこで、僕のお腹がささやかながら空腹を訴えた。集まる視線が少し恥ずかしい。

「玲君、今日何か食べた？」

僕は羞恥に少し顔を染めながら首を横に振る。そういえばさつき何か食べようと思ってたんだった。

「あの、伏見君。私何か作ってこようか？ その、簡単なものしか出来ないけど……」

古川さんが少し身をのりだす。

「あ、ありがとう。でもいいよ。下にお粥が用意してあるから」

不意にさつきの、意識を失う直前感じた柔らかさを思い出してしまい、気を抜くと視線が、その、……胸部、にいつてしまいそうなのを根性でそらしつつ僕は答えた。

「それなら温めてくるね」

立ち上がる古川さん。

「なら、あたしも行くよ」

「あ、待つて優」

続こうとする優を呼び止める。

「悪いんだけどさ、お茶か何か持ってきてくんないかな。みんなの分も」

空腹と同時に思い出したけど僕はもう喉がからからなのでした。

「うん、分かった」

ちよっと待つててね、と優は下へ降りていった。

「ふむ、それにしても……」

「何、野々山さん？」

人数が減った途端にじろじろと僕を見る彼女。僕はなんとなく野々山さんに苦手意識を持ち始めてます。なんというか、姉さんや日向会長と似たような感じがするというか、うん、そんな感じ。

彼女はおもむろに僕を指差した。

「伏見、君は随分と可愛らしい恰好で寝るのだな」

「え？ 何が？」

僕は首を傾げて自分を見る。

「あら、だめよ真琴。せっかくみんな黙ってたのに」

いつもより四割増しでにつこりしている気がする樋口さんがたしなめる。その隣では野々山さんを非難するように琴音ちゃんがわずかにうなずいてた。だけど、

「ねえ、どこがおかしいの？」

僕には何の事だか分らなかった。

「……伏見、本気で言っているのか？」

「うん」

けれどそんな反応は彼女たちにとって意外なものだったらしい。

僕はもう一度自分を見してみる。でも僕が着ているのはごくごく一般的なパジャマだ。

「ねえ、なにかおかしいところがあるの？」

「いや、いい。君は是非そのままでもいい」

「ねえ、伏見君。ちなみにそのパジャマは自分で買ってきたの？」

「母さんが買ってきたけど？」

「……ちなみに私服は？」

「姉さんと母さんが買ってくるけど？」

そこで三人は顔を見合わせた。

「どうしたの？」

「……ううん、なんでもない」

「ええ、少し意外……でもないわね。よく考えてみたら」

「ふむ、あの姉ではむしろ当然か」

……姉さんがどうかしたのだろうか？ 謎だ。

「玲君お待たせ」

僕が疑問に思っていると、お盆にコップを乗せた優が戻ってきた。
「ちよつとコップとお盆探すのに手間取っちゃったよ。はい、どうぞ」

お盆を机に置いて、その上の一つを手渡してくれる優。

「あれ、コップとかって場所変わってた？」

勝手知ったる他人の家、ではないけど優なら大体知ってると思つてたけど。

「コップはともかくお盆の場所までは知らなかったから、それもそうか。」

「陽菜ももうすぐ来るからね」

僕は麦茶を一口……と思つてたけど、自分で思つてた以上にのどが渴いてたようで、止まらずそのまま一気のみ。

「……ッ、ゴホッ」

むせた。

「……レイっち、大丈夫？」

「っ、ふう。うん、ありがと」

ちよつと涙目になりながら、背中をさすつてくれている琴音ちゃんにお礼を言う。

正直しんどかった。胃の中身が逆流するかと思つたよ。

「そんなにのどが渴いているなら私のも飲むか？」

コップを掲げながら提案する野々山さん。でも、

「いや、いいよ」

だつて中身減つてるし。

「やれやれ。せつかく間接キスが手に入るというのに」

いえ、いりませんから。

そこで、野々山さんの発言を聞いて何を思つたのか琴音ちゃんが不意に自分の麦茶をあおり、

「……どうぞ」

コップを僕に差し出してきた。

その腕はまっすぐ僕に伸びていて。その瞳は僕が断るなんてみじ
んも考えていなさそう。ついでに言えば、その頬はほんのり赤ら
んでいて。

「いやいやいや、おかしいからその行動！」

僕の至極真つ当な訴えは、

「……？」

首を傾げた彼女に全く効果を示さない。

ちよつといきなり何言ってくれてるのさっ！ という視線を野々
山さんに向けると、

「ささっ、グイッといくがいい」

親指を立てながらニヤリと笑い返された。

ダメだ。この人には何を言っても無駄だ。優は優でなんか急に不
機嫌になつてるのが伝わってくるし、樋口さんは満面の笑みと期待
の伴った生温かい視線でこちらを見てる。

自分の家の自分の部屋なのに、なんでこんなに居心地が悪いのだ
ろつか。もうとりあえず若者らしく世界が全部悪いということにし
て現実逃避したい。もしくは誰か助けて。

コンコン

その願いが届いたのかはわからないけど。

「伏見君。お粥温めてきたよ」

古川さん参上。今の僕にはあなたに後光が差して見えます。

お願い、この状況を何とかしてください。

ちっ、せっかく面白い事態だったというのに。

心中で毒づき、陽菜ももう少しだけ遅く来てくれればよかったの

にと思う。私は美理と視線を交わし、落胆のため溜め息を吐く。いや、吐こうとした、その時だった。陽菜が、動いたのは。

彼女は部屋を一瞥して状況を把握。おもむろに伏見のすぐ近くに寄って、行動した。

ふー、ふー、はい、あーん（「ほんのりとかぐわしい湯気の立ち昇るお粥を木製のスプーンですくい上げ、熱を冷ますべく数度息を吹きかけ、伏見に差し出して食べるよう促した」）。

そのすぐ近くに座る琴音のことなぞ眼中にないかの行動。

これには私、美理、優、そしてさすがの琴音も目を丸くして絶句する。

肝心の伏見はというと、

「えっ、なんで!？」

当然ながら目茶苦茶に動揺していた。

「はい、あーん」

笑顔で威圧をかける陽菜はスプーンを5cm近づける。
ブレッシャー

「えっ、あの、その、自分で食べられるから……」

「あーん」

さらに5cm。

「……あーん」

諦めた伏見の声は震えていた。

「はい、あーん」

対する陽菜は、先ほどの威圧感はどこへやら。とてもうれしそうだ。

「おいしい？」

おいおい、それは君が作ったものではないだろう。

「う、うん」

いやいや、君は今ろくに味の分かるような状態ではないだろう。数分前よりも確実に顔色が紅くなっているのが分かる。風邪が悪化しなければいいのだが。

ここで琴音が動いた。

自らの鞆に手を伸ばし、取り出したのは弁当。

それを両手で抱え持ち、伏見に向き直り口を開く。

「……レイっち、その、今日もお弁当作ったから、良かったら食べてほしい」

いじらしい。言葉だけを聞くとなんといじらしいのだろう。しかし、陽菜と同等、もしくはそれ以上に悪質な気がするのは私だけだろうか？

陽菜の場合、てめえ、断ったら殺っちまうぞ、といった感じの迫力があつたのだが、琴音の場合、断ったら泣いてしまいますよ、といった気配がするのだ。

「……食べて、くれる？」

かすかに揺れる不安げな声。

「う、うん……」

当然伏見が断れるはずもなく。

「……じゃあ、はい、あーん」

さっきと同じ状況に陥るわけで。

とりあえず私には伏見の風邪が悪化しないよう祈ることしかできなかった。だってせつかく面白くなってるのに止めるなんてもったいないし。

というわけで、がんばれ、伏見。

追記その1・優が静かだな、と思ってたらいつの間にかいなくなっていた。美理に一言帰ると言ったらしい。

その2・伏見のパジャマには驚かされた。と言っても特別奇抜なデザインをしていたわけではないのだが、全身にデフォルメされた猫がプリントされたパジャマ、しかもサイズが一回り大きなものを何も疑問を抱かず着ているとは。

その3・後日、陽菜にどうしてあんな行動をしたのか聞いたところ、「その、キッチンにいたら何か気分が舞い上がっちゃって……」と

のこと。自分がどれほど大胆なことをしていたのか、思い返す陽菜は随分と恥ずかしそうだった。

その4・しまった……パジャマ姿に琴音と陽菜の対決。せつかくのシャッターチャンスだったというのに逃してしまった……。

その5・ちなみに伏見の風邪は悪化することはなかった。

16 相談してみる

「わっ、わ」

「大丈夫か、玲？」

「うん。ありがとう姉さん」

朝の電車というのは一種の生き地獄だと思う。幸いぎゅうぎゅう詰め、というほどではないのだけど、

「わっ」

「大丈夫か、ほら無理しないで私を掴んでいればいいから」

吊り革の数が足りないから、電車が揺れるたびにふらついてしまう。……まあ、もともと吊り革が空いてたとしても掴むためには背伸びしなければいけないから大変なんだけど。

「ほら」

姉さんが少し力強く僕を引き寄せる。その結果、

「ね、姉さん？」

僕は前から抱きつくような、密着した状態になってしまった。

「な、楽だろう」

微笑みながら言う姉さんはとても嬉しそうで。

——昨日は僕をすごく心配してくれたし……。

そう思った僕は恥ずかしさに耐えながら、少しだけ姉さんに身をゆだねることにした。

「あのさ……もしかして琴音ちゃんって、僕のこと……好きなのかな？」

意を決しての問いかけ。すると目の前の二人、佐川敬吾とリチャード・ボガードは互いに顔を見合わせてため息を吐いた。

場所は学食。今日もお弁当を作ってきた琴音ちゃん一行に連行さ

れかけたけど、無理を言って今日はなしにしてもらった。ただし明日は確約、ということになったけど。

「な、何さ。僕だってちょっと自意識過剰になって思ったけど、これ見よがしにため息なんか吐かなくていいじゃん！」

僕は猛烈な恥ずかしさに襲われながら抗議。

「違う。玲、お前全然分かってない」

「ソウダ。オレたちはオマエのあまりのニブさにアキれてるんだ」

敬吾はカレーライスを一口。リッチはうどんをすすりながら言う。どうでもいいけどリッチは日本人のように音を立てずに静かに食べている。

「どういうことさ？」

「そうだな……お前、田村のことどう思う」

「ツイデに、フルカワのこともナ」

「……何で優と古川さんが出てくるのさ？」

僕は首をかしげた。

「だからお前は鈍いつてんだよ」

心底呆れたような敬吾とそれに同意するリッチ。何なんだろう、まるで優と古川さんが僕のことを好きだって言ってるみたい……だけれどそんなことあるわけないか。

「あのさ、わかるように言ってくれないと困るんだけど」

僕はやや半眼に二人をにらむ。我ながら迫力が無いのは理解しているが、それでも不機嫌さをアピールすることはできるだろう。

「そんなこと知るか。勝手に困ってる、っていうか俺たちが言っているようなことでもないしな」

「マア、もうじゅうぶん言った気がスルけどナ」

でもそんな僕に取り合う気は二人には全く無いようだった。

「……ならいいよ。じゃあ最初の質問だけどさ、どうなのかな？」

考えてもよく分からないし、そんなことよりこちらの方が僕にとって重要だ。

「最初の質問って、何だっけ？」

「サア？」

……殴っていいですか？

「その、琴音ちゃんって僕のこと好きなのかなって……」
語勢がだんだん弱くなった。だってしょうがないじゃない、恥ずかしいんだもの。

「ん。そうなんじゃね」

なのに敬吾は視線をこちらに向けることも、特に考えた様子もなくすぐに答えた。

「あのさ、そんな軽く言わないでくれないかな」

「しかしだな、レイ。ほかにリユウなんてないだろ」

リッチは言いながら琴音ちゃんがくれたお弁当を指差す。

「やっぱり、そうなのかな……？」

僕はつぶやき、手元のお弁当に視線を落とす。今日は、色々な具が挟まったバケットサンド。お店の物のようには言い過ぎかもしれないけど、見た目がきれいで味も美味しい。

「でも、どうしたらいいんだろう？」

これだけのことをしてもらって、僕はどう応えたらいいか。悩む僕に答えたのはリッチだった。

『どうもする必要はねえよ』

「リッチ？」

『向こうが付き合いたってんなら答えてやればいい。でも、まだあいつは何も言っていないんだ。だったらどうもする必要はない。向こうの好きにさせとけよ』

なんとなく言いたいことは分かる気がする。でも、

「いいのかな、それで？」

『いいんだよ、それで。……それに向こうだって好きだって告白する前に振りたいなんて思わないさ。だから焦って答えなんか出さなくていい』

途中、リッチはすごく優しい眼をした。

『まあ、お前が三輪のことを好きだってんなら付き合っちゃえばいい』

いだけだけどな」

けれどすぐにいつものリッチに戻ってしまった。隣では、突然英語をしゃべりだしたリッチに会話から置いて行かれた敬吾が遠い眼をしていた。

会話から置いていかれた俺は少々寂しい思いをしながら食を進める。隣から聞こえる英語はネイティブということもあって断片的にしか分らない。

リッチが英語で話すのは、自分の語彙が足りないときか真面目に話そうとするときが大半だから口は挟まない。

——まあ、雰囲気から察するに真剣なのはもう終わったみたいだけどな。

玲が少し顔を赤くしてリツチにわめく姿を見て、そう判断する。からかったりするには日本語じゃ不十分、とはいっつか聞いたリツチの言。イジられる対象となる玲を可哀想だと思う。

玲をからかうのはリツチだけではない。まず筆頭に彼の姉が挙げられる。加えて田村の姉、若い教師の一部、名前も知らない上級生。同年の女子にも玲をからかう者はいる。最近では三輪……は素なのかよく分からないが、野々山、樋口が挙げられる。

幸いそのどれもがいじめというレベルからはほど遠く、見る側からすると微笑ましい。……まあ、いじめにまで発展しないのは彼の姉が背景に存在してるのだけだ。

玲自身が心の底から嫌がつているようには見えないのは、きっとあの姉に小さいころから慣らされているためだと思う。

「もうリッチ、いい加減にしてよ！」

「ハハハハハハ」

まあ、多少はうんざりもするだろうけど。
改めて玲を試してみる。

伏見玲。男としては間違った方向に整いすぎた顔立ちに小学生並みの華奢な体躯と身長。それらは玲にとってとても大きなコンプレックスになっている。そのことについて悩んでたこともあったのを俺は知ってる。

殊更に鈍いのはそのためだ。玲は自分が男として好かれるだなんて思わない。だから好意に気付けない。とはいえ、少しだけ安心した。田村や古川は少々可哀想に思うが、やりすぎなくらいあからさまな好意だけど、自分で気付いたから。気付くことができたのだから、それが玲の自信になればいいと思う。

「どうしたの、敬吾？ にやついてるけど」

「いや、何でもない」

ただ嬉しかっただけだと心中で続ける。

「なんかブキミだな」

失礼な。

#16 相談してみる（後書き）

更新です。大変長らくのご無沙汰、申し訳ありません。

今回は以前の構想から後編部分を書き直してお送りしました。以前書いたものは優の一人称だったのですが、どうもしっくりこなかったので敬吾に急きょ変えて書き直しました。

自分ルールというものがありません。このお話は前編部分を玲の一人称、後編を誰かの一人称という自分ルールで書いています（#1とおそらく最終話のみ玲の一人称＋玲の一人称）。

しかしこの自分ルールが厄介でもあります。

ほかの人の話を書きづらくてしょうがない。

玲のほかに二人以上書きたい人がいたら切り捨てなければいけないからです。玲が確実に冒頭に入るため、玲のいない場所での話も進みにくい。

昔話とかなら番外で書いてもいいと思うけど、進行中の話で番外も何もないだろうと思う。とはいえ、今さらこのスタイルを変える気はありませんが。

ではこの辺で筆を置かせていただきます。お目汚し、失礼しました。

#17 男女比率 一対三

土曜日。

僕は駅の近くの大きな時計の下、噴水の前で待ち合わせをしていた。以前優と出かけた時にも使った場所だ。

事の起こりは二日前まで遡る。

その日、僕は琴音ちゃんにお弁当の事を丁重にお断りしようと思っただの。

僕に彼女の気持ちを受け入れるつもりは全く無い、という訳ではない。そもそも彼女が僕の事を好きなのかどうか未だ確信は持てずにいるし、自分が彼女をどう思っているかも分からない。

どうしても自意識過剰ではないかと思ってしまう、そこから思考が続いていかないのだ。

しかし、そういった気持ちだとか想いだとかとは別に、お弁当という物は少なからずお金のかかる物。自分の立ち位置もはっきりしないのに彼女に甘えてしまうのは良くないと思ったのだ。

なので金銭的に悪いからと断りの旨を申し出ただけ、

「ふむ、では今度遊びに行こうではないか」

と横から唐突に野々山さんが口を挟んできた。

『琴音が勝手にやっていることなのだから君は気にせずそれを享受すればいい。どうしても気になるならば何かお返しをすればいい』
という彼女の弁に押し負けて、四人で遊びに出かけ、琴音ちゃん分の僕が負担するという運びになった。

それが今、僕が噴水の前に立っている理由である。

「やあ、伏見。中々早いんだな、感心だ」

気さくに片手を上げてやって来たのは野々山さんだった。黒のロングコートに黒のスラックス。黒い靴に黒の革手袋。首元には何故

かここだけ真つ赤なマフラーが巻かれている。

「別に今来たばかりだよ」

待ち合わせの時間にはあと十分。特別早いというわけでもないだろう。それから四、五分経って樋口さんが来た。

「おはよう二人とも。琴音はまだかしら？」

樋口さんは穏やかに微笑み、次いで首をかしげた。ベージュのコートは前をすっかり閉めて、ロングスカートに白いマフラー。どことなく落ち着いた印象だ。

「ああ、いつもなら大抵最初にいるんだが」

「きつとぎりぎりまで悩んでるんじゃないかしら？」

「いったい何を？ 問いかけてみるけれど樋口さんは楽しそうに笑っただけだった。

それから五、六分たつて琴音ちゃんが駆けて来た。

「……遅れて、ごめんなさい……」

苦しそうに肩で息をする彼女は、十数秒後息を立て直し僕を見た。コートにマフラー、手袋に膝よりも少し上のスカート。全体的にふわっと、アクセントに少量のフリル。そんな彼女の顔は普段よりもこわばっているように見えた。

「どうしたの？」

心配になって問いかける。

「あら伏見君。せっかくの女の子との待ち合わせなんだから」

「そうだと伏見。まず服装を褒めろ、常識だろう」

答えはほかの二人から返ってきて、それを聞いた琴音ちゃんが心なしか恥ずかしそうに瞳を伏せる。

えっと、どうしたらいいのか……。

「それってどこの常識？」

「そんなことはどうでもいいから、君が見るのはあつちだ」

とりあえず逃げてみたけどあえなく玉砕。僕の顔は野々山さんの手によって琴音ちゃんの方へしっかりと固定される。その視線を受けてますます瞳を伏せる彼女はとても可愛く感じた。だから、

「すごく、似合ってるよ」

思わずもれた、けれど直接可愛いとは言えないのが僕の限界。それを聞いてゆつくりと顔を上げる彼女に、僕は恥ずかしさを誤魔化すように笑いかける。

「ありきたりね」

「ああ、この上なくオリジナリティに欠ける」

……他の二人は無視することにした。

甲高い音が連続して響く。目にも留まらぬ速度の戦場。目の前で行われているハイレベルな争いに知らず目を奪われる。

「ふふっ、知らぬ間に腕を上げたようだな、美理」

余裕の表れなのか、軽い口調で話す野々山さん。しかし対する樋口さんに言葉を返す余力はなく眼前の戦場から意識を放すことはない。

始まってから五分以上続く戦いは、いまだどちらも決定打を与えることなく、しかし、ふとしたことで勝負の付いてしまいそうな緊張感を――

そこで僕は服の袖を控えめに引つ張られ、そちらに振り向いた。

「……もう飽きたから別のところ、行こ？」

語尾をやや上げて僕を誘う琴音ちゃん。

「よしっ！」

そしてそのほんの少し目を離れたときに先ほどの戦場、エアホッケーは野々山さんが先制点を挙げていた。

僕たちは今ゲームセンターにいる。

入ってすぐにエアホッケーの台に向かった二人を追うと思ってもよらないレベルの試合が展開された。一度パットを止めてワンクッシ

ヨンおいて、なんてことの一切ない高速バトルは僕にとって感嘆せずにはいられない試合だったのだが、琴音ちゃんにとっては見慣れた光景なのか、エアホッケーに興ずる二人を置いて僕の手を引っ張る。

「えっ、でも……」

「……………」

無言の催促。ただ、袖をつかむ指は弱弱しくて。だから、

「うん。それじゃあ何しよっか？」

それに抗うことなんてできなかった。

それからガンシューティング、ギターやドラムのゲームを二人で遊んだ。もしかして琴音ちゃんもとてつもない腕前を披露するのは、と思っただけと普通に人並みで安心した。女の子にゲームで負けるのは何となく悔しい気がする。

その頃になつてようやく決着がついたのか、野々山さんと樋口さんが合流した。

「時間内に終わらないからどうしても長くなるな」

「いつもエアが途中で切れちゃうしね」

エアホッケーで途中でエアが切れるなんて初めて聞いた。四人がかりでクイズに挑んだけど、ぼくたちの中で得意分野が結構かぶってたのでそんなに長くは続かなかった。

「さて、では最後にあれでもやろうか」

時計を見ると十二時半を少し過ぎたころ。野々山さんが指差した先にあったのはプリントシール機。バージョンが変わったばかりの最新タイプだった。

「えっと……僕、も？」

「当然」

僕の問いかけに断言する野々山さん。しかし待つてほしい。男が一に対し女が三。そんな状況であんな狭い場所になんて僕には無理です。

我ながらなんとも情けない理由である。それを告げると当然みん

な不満そうにする、かと思いきや樋口さんだけは何故か笑っていた。

「樋口、さん？」

少しだけ嫌な予感。

「つまり伏見君は女の子が三人もいるから駄目なのよね」

「う、うん。まあ、そうなる、のかな？」

「それなら琴音と二人なら構わないわよね」

一対一になるのだから。付け加える樋口さんは反論は許さないとばかりに自身の人差し指を僕の口に押し付けた。

狭い場所に二人きり。シート一枚でしか遮られていないはずなのに、あれほどのさかったゲームセンターの喧騒がどこか遠く感じる。

自分は今緊張している。それがたやすく自覚できる。そしてそれがどこか自分を恥ずかしくさせる。

付き合いの薄い人たち、例えばクラスメートや教師から自分は無表情だと評される。当然感情がないわけではなく、ただ表情にあまり出ないだけ。分かってくれる人は分かってくれるので、特に気にしていない。気にしていないのだが、しかし今、隣に自分が緊張していることが分かるだろう人がいる。

それがなぜかこの上なく自分を恥ずかしくさせる。そしてその恥ずかしさも彼には伝わってしまうだろう。それがさらに私を恥ずかしくさせ、この狭い場所にいる限りその羞恥に終わりは来ないのだ。唯一の救いは、緊張しているのは自分だけではなく隣に立つ彼もであることだろう。

「えっと……じゃあ、どれにする？」

ほんの少しだけぎこちなくこちらに問いかける彼。

「……これ」

フレーム設定、指差す画面。けれどそれはてきとうちに選んだもの

だった。

今更、本当に今さらだが自分の服装が気になってしまったから。実際に何着か取り出して鏡の前で合わせて、なんてことをしていたわけではないけれど、何度も思い浮かべた‘何を着て行こう’。昨日のうちに‘これにしよう’と一式取り出して、なのに今日の朝不安になってもう一度考え直した。

そう、これだけ悩んだのだ。それに合わせて髪型も少し、本当に少しだが変えてみた。……きつと気づいてはいないと思うけど。

何もおかしいところはない。そんな言葉で生じた不安を鎮静化させる。

「じゃあ、撮るよ」

隣からの呼びかけ。改めて画面に映る自分の格好を確認。

うん。きつと大丈夫。

自分にもう一度言い聞かせ、それから画面に映る隣の彼を見つめることにした。

「なんだこの微妙な距離感は。もつとくつつけ」

「だめよ伏見君。こういうのは男の子がもつと積極的にしなくちゃ」

出てきたのを勝手に四等分した二人は、そんなコメントをしながらシールを手渡してきた。

フレームの違う四種類の写真。しかしそのどれもが互いに緊張しているのか、どこかぎこちない気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9939b/>

そんな僕の日常

2010年10月10日00時38分発行